

男子新体操に 恋してる！



青森大学2010

椎名桂子

第1章 伝説の「青大2009団体」

TBSドラマ「タンブリング」放送直前！勝手にタイアップ企画～ 男子新体操の魅力をお伝えします！～青森大学(団体)～

2002年の全日本選手権で、初めて団体3位となり、翌2003年から5連覇を成し遂げた青森大学。今ではおもしろお洒落男子新体操の名門大学ですが、じつはその歴史は浅いのです。しかし、今では男子新体操は、「青森大学」を抜きには語れないほどの独自の存在感をもっています。

私が、まだ男子新体操の魅力にめざめていなかったころに、若い女の子の新体操ファン達から言われたことがありました。「青森大学の団体見てください～！もお、見ていてせつなくなりますから。」そのときは、え～、ほんと？と思ったものです。男子新体操はダイナミックで迫力あって、カッコいいけれど、「せつない」って…？



でも、見てみて納得しました。男子なのに、ほんとに美しい新体操で、しかもその美しさは、単に動きや体の線が美しいというだけでなく、「情感」が漂ってくる、そんな美しさだったのです。タンブリングの迫力はもちろん文句なしにあるのですが、それ以上に、青森大学の新体操は美しい、そして「せつない」。それが魅力でした。

そんな青森大学の団体演技ですが、2009年全日本選手権でのそれは、また格別なものでした。この年の青森大学のメンバーは、例年以上にがっちりしたタイプの選手が多かったように思います。ライバルである国士舘大や花園大学にスラリとした選手が多いのに比べると、体型では不利(←この感覚は女子新体操的かもしれませんが)、そう感じたのですが…。

しかし、そのがっちり系チームが、この全日本選手権で見せてくれた演技は、もしかしたら青森大学史上最高かもしれないほどに「美しく」そして、「哀しみ」が伝わってきました。



するとそうではなく、別の楽器も使われてはいたのですが、印象としてはどこまでもやさしいピアノの音だけ、がフロアに響いていたように感じられました。本来は、静かな曲では合わなそうなタンブリングもすべて、どこまでも静かな曲で彼らは踊りました。ともすれば単調で盛り上がり欠ける演技にもなりかねない、そんな曲で、曲のイメージとはかけはなれた体型の男たちが踊ったのです。

一歩間違えば「こっけい」にすら見えそうな、そんなミ

スマッチがまったくミスマッチではなく、美しく美しく、心臓がぎゅっとなるくらいの感動を私は覚えました。新体操が大好きな私は、新体操を見て「感動」することが多いのですが、ここまでのレベルの感動は、そう何回もはありませんでした。

最高レベルの感動。

それを与えてくれたのが、2009年全日本選手権での青森大学の演技でした。

ただ優勝するために。ただ高い得点を得るために。ではきっとこんな演技はできない。とそのとき感じました。この演技には、伝えたい想いがある、きっと成績ではない「なにか」のために、選手達は踊っていると感じました。演技を見ているうちに、本当に涙があふれてきました。



なんだか、不思議な空間にいるような、そんな気分させられた3分間でした。

そこで私が見ていたものは、「新体操の演技」ではなかったのではないか、そんな気さえたのですが、あとになってその理由がわかりました。

<http://www.plus-blog.sportsnavi.com/jpngym/article/405>

こんな思いがこもった、こんな意味のある演技だったのですね。あの「なにか新体操ではないものを見ている感じ」は、やはり間違いではなかったのだ、と思いました。

そんな偉大な先輩達の築いた礎のもと、青森大学は、これからも強く、美しく、そしてせつない新体操を見せ続けてくれるに違いありません。

<撮影:榊原嘉徳>

第2章 2010 シーズンイン前

TBSドラマ「タンブリング」放送直前！勝手にタイアップ企画～男子新体操の魅力を伝えます！～春日克之(青森大学)～

ドラマ「タンブリング」は、男子新体操の団体競技がメインになるようですが、個人競技もしっかり登場するようです。山本裕典くんが所属する烏森高校新体操部のエース・火野(AAAの西島隆弘くん)は、「団体はやらない」と主張し、個人で上を目指す「ちょっとやなヤツ」という設定らしいです。

じつは、「タンブリング」の撮影にエキストラで参加したとき、新体操の演技シーンは団体演技がほとんどで西島くんの登場シーンはありませんでした。それでも、撮影にはしっかり参加していて、ずっとリング(手具)を扱っている西島くんを見て、私はずっと「国士館大の学生さん？」と思ってましたからね、ええ最後まで。

だって、リングを投げたり、回したり、それはそれは巧みに手具を扱っていたんですよ。ただ投げるとるんじゃなくて、投げたリングに倒立して脚を入れたりしてましたから！ こんなことできる素人さんがいるわけないじゃないですか！ おまけに「JAPAN」のネーム入りのジャージを着ていたので、「全日本クラスの試合に出場したことのある国士館大の学生さん」と、私はすっかり思っていたんですよ！

長い前置きになりました。

そんなわけで、今回から個人選手も登場します。

そして。

1回目は、「King of 男子新体操」・・・春日克之選手です。

春日選手は、2009年の全日本選手権チャンピオンです。さらに、2008年も優勝しており、連覇を成し遂げています。男子新体操は、1つのミスが大きく得点に響くため、どんな名選手でも、連覇はなかなか難しいのです。春日選手の前の連覇は、1995～1997年の朝野健二さんまで遡らなければならないのです。

男子新体操追っかけ歴がまだ浅い私ですが、2008年の全日本選手権では初めて真剣にメモをとりながら男子新体操取材しました。このとき、春日選手が優勝しているんですが、正直、チャンピオンにしてはちょっと地味？な印象でした。

たしかに技はすごい！スピード感はすごい！のですが、よりダンサブルで表現力にたけたタイプの選手のほうが、私の印象には残っていた、それが2008年



の全日本選手権でした。

ところが。

2009年の全日本選手権。

春日克之選手の演技は、まさに「神」でした。

すばらしい選手がたくさんいて、すばらしい演技を次々に見せた全日本選手権。「これは、春日選手の連覇は厳しいか・・・」と思わせる演技もたくさんあったのです。

が、いざ春日選手が登場すると、その圧倒的なスピード、運動量の豊富さ、手具扱いの巧みさ、実施の正確さ。そして、体のすみからすみまで神経の行き届いた動き。すべてが、突き抜けていました。

2008年の春日克之選手もたしかにうまかった。だから優勝しているのです。が、1年で彼は、「前年度チャンピオン」の春日克之をはるかに凌駕する選手に成長していたのです。

驚きました。春日選手のすごさに。

そして、男子新体操の奥深さに。

男子新体操は、大学生が、全日本で優勝した選手が、さらにこんなにも進化できる余地のあるスポーツであるということに、感動しました。

2008年にも春日選手に電話で、インタビューさせてもらいました。そのときに、印象的だったのは、彼が2008年のインカレで、自分では完璧な演技をしたと思っていたのに、点が伸びず優勝できなかったことがとても悔しかった、という話でした。なぜ点が伸びないのか？ 彼はその理由を審判に聞いて回ったそうで



す。返ってきた答えは「大きさが無い」・・・。たしかに、春日選手は小柄です。しかし、それは努力で変えられるものではない、ですよ。

でも、彼はそこで「身長が低いのは仕方ない」とあきらめませんでした。すこしでもかかとを高くして、すこしでもつま先をのばして、全身を大きく動かし、高くとび、エネルギーッシュに動く・・・小さな体をすこしでも大きく見せるためにやれることはすべてやった。そして、勝ち取った全日本初優勝だったというのです。

女子の新体操を見慣れていて私には、「点が伸びなくて納得がいかず、審判に理由を聞いた」ということがまず驚愕でした。

そんなことしていいのー？

していいみたいです。もちろん、審判にクレームをつけるというわけではありません。「どこがいけないんでしょう」「どうすればもっとよくなるでしょう」それを審判に聞くことは、反逆でもなんでもなし。熱意なのです。自分の「勝ちたい」気持ちに、そこまで正直に真摯に、そ

して能動的に行動できる、春日克之はそういう選手なんだ、と。私がそれを知ったのは、不覚ながら 2008 年の彼の演技が終わったあとでした。

そして、2009 年の全日本選手権。1 日目の個人総合、春日克之選手はリングの 29 番目の選手として登場しました。その演技は「すごい！」としか言いようがありませんでした。気迫あふれる演技でありながら、美しい。まさにパーフェクトな演技でした。

さらに、2 種目目のスティックでは、せつなさや哀愁をあますところなく表現。1 分半の演技中、ハイスピードで全力疾走するような印象の演技が持ち味の春日選手ですが、スティックはもっとも緩急のある作品で、彼が技やスピードだけでなく表現にもこだわっていることがよくわかる演技でした。

2008 年の電話インタビューの最後に、「自分の新体操でいちばん伝えたいものは？」と聞いたときの、彼の答えを、この演技を見ながら私は思い出していました。

「見ている人の感情を動かしたい。せつない思いをこめた動きではせつなく感じてもらいたいし、カッコいい動きはカッコいい！と思われたい」

彼はそう答えていました。技術にたけている選手でありながら、究極的に目指しているのは、やはり「表現すること」であり、「伝えること」なのだということを、とても嬉しく頼もしく感じた 1 年前のことを思い出しました。そして、今、目の前にある春日克之の演技は、まさに彼が目指していた「感情を動かす演技」でした。大学 4 年生。学生時代最後の、いやもしかしたら現役としての最後になるかもしれないこの試合で、彼は夢を果たしたのだなあ、と涙が出ました。

個人総合 2 日目も春日選手の勢いはまったく落ちることがありませんでした。クラブでは全身からみなぎる気迫と情感に圧倒されました。この作品は、今年から演じているもので、4 種目の中ではもっとも新しい作品でしたが、完璧にこなしていました。新しい作品だけに、「自分にしかできない演技」をとことん追究して作ったという春日選手の思いがたしかに伝わってきました。彼ならではの、連続するタンブリングなど見せ場も多く、すばらしい演技でした。

そして、最後の種目・ロープでは、まさに「全力投球！」の演技、「渾身」とはこのことだ！という演技をやりきり、演技終えたときにはガッツポーズも出ました。この日の春日選手は試技順が早く、演技を終えても、まだ優勝できるという確信はなかったらと思います。

でも、この演技を、全日本選手権でやり切った。4 種目通じて、崩れることなく王者の演技を見せることができた。それでもう十分だったのではないでしょう。そして、彼がそれだけの演技をやり切った



ときには、結果もきつとついてくる。もしかしたら、彼にはそれもわかっていたのかもしれませんが。

2008年のインカレで優勝できなかったときの、春日克之選手は「身長の高さ」というビハインドを克服できていなかったのかもしれませんが。2009年の全日本選手権でも、彼はたしかに出場選手のなかでも小柄なほうでした。しかし、その演技は、どこまで雄大で美しく、精悍で、ときにせつなく、男子新体操の真髄を見せてくれました。たとえ小柄でもフロアでの彼はなんと大きく見えたことか！ それは、彼自身が、常に向上心を持ち、努力を怠らず、新体操に懸け続けてきたからこそ手に入れることができた「大きさ」だったのだと思います。

2009年、春日克之選手は、ゆるぎなく「King of 男子新体操」でした。

競技終了後、今回は電話ではなく、会場で直接お会いして春日選手にインタビューすることができました。完勝ともいえる、個人総合優勝を成し遂げたという昂ぶりは感じられず、冷静に朴訥に言葉を選びながらいろいろな話をしてくれました。（雑誌掲載時はほんの少ししかコメント使えませんでした、やっと思書を書くことができます！）

「技術的には、昨年から大きく変わったところはないのですが、とにかく質をあげていくということにこだわって練習してきました。やっている内容は昨年と同じでも、美しさをあげて、引くところがない、という演技を目指してきました。

もちろん、演技構成も自分にできる限界に挑戦するものを作って、こんなことができるんだ！ というところを見せたいと思っていました。自分の持ち味はスピードとジャンプ力なので、とにかく速く高く、動き続けながらも引くところがない、そんな演技をしたいと思って練習してきました。」

誰よりも難しいことを、誰よりも正確に隙なくやろうとしていた、春日選手の「攻めの気持ち」が痛いほど伝わってくる話でした。

思わず私は聞きました。

「そこまで高みを目指した演技をするとミスしてしまう可能性が高くないですか。それなのに、どうしてあんなに完璧に演じることができたんですか？」

春日選手の答えはシンプルでした。

「練習しかありません。練習してきたことを信じるしかない。」

それに、と彼は続けました。

「悔いの残る練習はしてきていませんから。」

2008年度・2009年度男子新体操チャンピオン・春日克之選手は、そんな選手でした。どこまでも自分に挑戦し、その挑戦に打ち克った、彼の神演技を見ることができて、私はとても幸せでした。

<撮影: 榊原嘉徳>

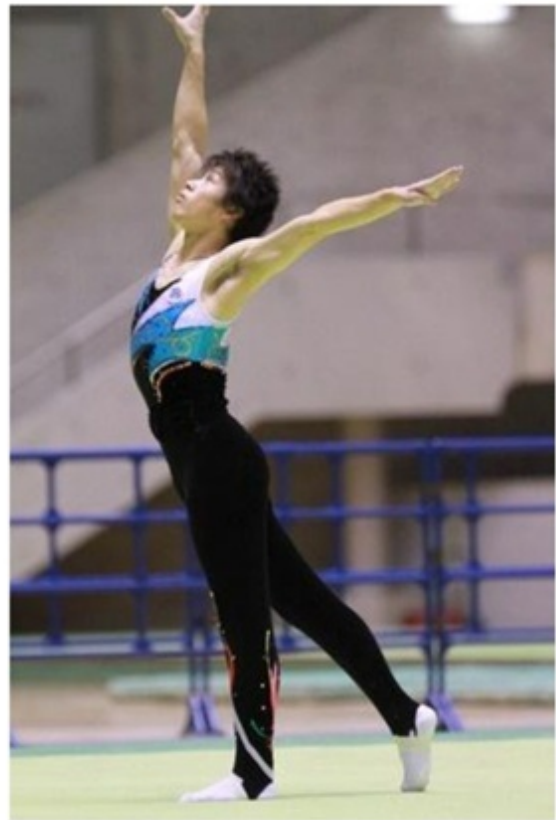
TBSドラマ「タンブリング」勝手にタイアップ企画～ 男子新体操の魅力を伝えます！ ～大舌恭平(青森大学)～

「大舌恭平」といえば、男子新体操の世界では、高校時代から有名な選手だった、ようです。（私が知ったのは遅くて申し訳ない）2006年のインターハイでは個人で優勝もしています。

しかし、「前から有名だった」なんてことを知らないで、なんの先入観ももたずに彼の演技を見ても、ほとんどの人がこの選手のすごさを感じることができるでしょう。

大舌選手は、男子新体操の選手の中では大柄なほうで、立ち姿ひとつとっても、美しくカッコいいのです。そして、なんと言っても、まさに「飛ぶ！」という印象の雄大なジャンプ！ 男子新体操の選手のジャンプ(宙返り)の滞空時間は、どの選手もすばらしく、はじめて見た人はどの選手を見ても「すごい！」と感じると思います。しかし、その中に大舌選手が混じっていたら、「あ。別格かも」と感じるに違いありません。それくらい、大舌選手は飛びます。

2008年のオールジャパン。私は大舌選手のジャンプに魅せられていました。「フライング恭平！」というキャッチフレーズが頭の中にぐるぐる回ってしまうくらい。しかし、あの試合で彼は……。ジャンプから直接腕をついて着地する技で、腕を怪我してしまいました。演技を中断し、すぐにフロアから運び出されたのですが、私の見ていた席からも、腕が妙な向きに曲がっている？ という様子が見えました。そして、彼の苦悶の表情も。2008年のシーズン最後の試合で、かなりの大怪我をした大舌選手が、果たして復活できるのか？ 不安になるほどのアクシデントでした。そのとき、私は男子新体操の怖さを思い知らされたのでした。



2008年のシーズン最後の試合で、かなりの大怪我をした大舌選手が、果たして復活できるのか？ 不安になるほどのアクシデントでした。そのとき、私は男子新体操の怖さを思い知らされたのでした。

2009年5月、東日本インカレ。大舌選手が復活できるのか。私のなかにあったすこしばかりの不安は見事に吹き飛びました。大舌選手は、1年前とすこしも変わらず華麗でダイナミックな演技を見せてくれました。ジャンプも変わりなく高く、大きくて。あれほどの大きな怪我をしたら恐怖心だって生まれるだろうに、まったくそんな風には感じられませんでした。

見事なカムバック！ その裏にどれほどの努力があったのか、はかりしれませんが、大舌恭平はまさに不死鳥のように飛んで見せてくれました。

彼のすごさは、その卓越した跳躍だけではありません。男子選手としてはかなり柔軟性にも秀でています。女子ではよく見られるもぐり回転を入れていたり、後屈を見せるポーズの美しさは格別なものがあります。さらに、動きに華があり、「踊り感」が抜群。先日の渋谷アックスでのダ

ンスイVENTでも、ダンサー然とした見事な踊りっぷりを見せていましたが、その片鱗は新体操の演技中にも十分見られます。

見映えのする大柄な身体、きりりとしたルックス、跳躍力、柔軟性にも恵まれ、踊り感もある。

大舌恭平選手は、新体操選手として必要なものをほとんど兼ね備えたスター選手に間違いありません。ただ、まだ2年しか見ていない私が言うのも僭越なのですが、しいて言うならば、種目によって手具操作にやや単調さや粗さが見えることがあるように思えるのです。いや、それはほかの要素がすべてあまりにも高いレベルでそろっているがゆえかもしれませんが。彼がもしも、目にもとまらぬようなスピード感で多彩な手具操作を身につけたなら、完全無欠のチャンピオンに近づくのではないだろうか？ そう期待してしまうのです。

5月22日～23日の東日本インカレ。さらに進化した大舌選手を見ることができるだろうことが楽しみでなりません。

<撮影:榊原嘉徳>

第3章 2010全日本インカレ前

男子新体操の魅力を伝えます！ ～小林 翔(青森大学)～

東日本インカレで、大学デビュー早々3位という快挙を成し遂げたのが、この小林翔選手です。

彼を初めて見たのは、2008年のユースチャンピオンシップでした。この年からユースチャンピオンシップで男子の競技も行われるようになり、その初代チャンピオンが、彼だったのです。

ちょうどダンス雑誌『DDD』の取材で入っており、男子新体操好きな編集長だったため、しっかり男子の優勝者インタビューも行ったのですが、そのとき、あまりの爽やかさにほんと、いい歳してぼおっとなってしまうのでした。

このブログでもすでに取り上げている青森山田高校の団体メンバーとしても活躍していた小林選手ですが、青森山田の演技が、それまでとはひと味違ったダンスブルなものになっていった時代の、まさに彼は中核をなしていたと思います。

ユースチャンピオンシップでの優勝者インタビューのとき、聞いた話ですが、彼はもともと野球少年だったそうです。しかし、野球でやっていくには致命的な故障があり、中学から新体操に転向したのだそうです。はじめは「男子が新体操？」という照れもすこしばかりあったと言う彼ですが、それもすぐに克服できたと言っていました。

彼には持ち前の柔軟性があり、それを生かして、男子新体操というステージで輝くことができるということに気づいたから、だったようです。「人にはできない動き

ができるようになると、見ている人がおおっと言ってきて、評価もついてくる、それが楽しいです。」2年前、当時高校2年生だった彼は言いました。

愛知県から青森山田高校に進学して、どんどん開花していった小林翔選手。資質にも恵まれていたことは間違いありませんが、高校時代は部活のあとに、ダンスレッスンにも通うなど、人一倍の努力を重ねてきた選手でもあります。

その結果が、2009年選抜、インターハイの個人での2冠達成だったのでしょう。昨年はユースチャンピオンシップがインフルエンザの流行で中止になったため、3冠はなりませんでしたが・・・。

10月の全日本選手権でも、大学生に混じって14位という堂々たる成績でした。このときは、クラブでしりもちをつくというミスがあり、それが響いてしまいましたが、女子ではよく見るバックルジャンプなども入った「小林翔」ならではの演技を見せてくれました。



大学生のなかで見ると、手具扱いなどはまだまだ発展途上にも見えましたが、静止したときのポーズの美しさ、静止から動き始めるときの間合いのよさなどに、卓越したものがあり、つなぎの動きの美しさ、かっこよさは、次世代王者の可能性を感じさせるものでした。

ユースで優勝したときに比べると、身長も伸びてかなり身体も大きくなり、フロアでの見映えもさらによくなっていて、大学生になってからの活躍は、十分に想像できました。

ですから、今回の東日本インカレでの小林選手の活躍は、ある意味、想定内ではあります。しかし、正直言って、大学デビュー戦でここまでとは期待を上回るものでした。

多くの偉大なる先輩達のいる青森大学の大型ルーキーとして、小林翔は、おおいなる飛翔を見せてくれました。ロープでは、格段にレベルアップした手具扱いも見せてくれ、美しい動きはさらに磨きがかかっていました。高校生のときは、いわゆる「かっこいい男の子」という印象でしたが、踊っている姿にはすでに「セクシーさ」さえ感じられました。

小林翔選手の大学時代はまだ始まったばかりです。あと4年のうちにいったいどこまで進化してくれるのか、楽しみでなりません。

願わくば、フィギュアスケートの高橋大輔選手のような、すべての音にのせた動きで、見る人を魅了するような。そして、「エロさ」さえも感じさせるような、魅惑的な選手になってもらいたいです。

今年のインカレは、8月15～17日に、青森で開催されます。関東や関西から出かけるにはすこし遠いですが、東日本インカレを見ただけでもかなり見所多かったので、絶対に行って損はありません。(西日本のチームも花園大学をはじめ、素晴らしいですから！)私は勢いですでにホテルを予約してしまいました(笑)。

「遠いからどうしようかな～」と迷っていた私に、「行くしかない！」と決意させた要因の1つが、この小林翔選手です。ぜひ、多くの方に見てもらいたいです。

<撮影:榊原嘉徳>

男子新体操の魅力を伝えます！ ～福士祐介(青森大学)～

2008年のオールジャパンで、当時大学1年生だった福士祐介選手は、個人総合6位になっています。上位には、春日克之、鈴木一世、北村将嗣らがひしめき、男子新体操に私が魅せられた、あのオールジャパンです。

しかし。

大変申し訳ないのですが、6位にもかかわらず、このときの福士選手の印象はあまり強くありませんでした。たしかにうまかった。ミスもなかった。きっちりと4種目演技をまとめてきたので、気がついたら6位にいた、そんな印象でした。能力は高く、しっかりした演技をしているのだけど、「個性」がちょっと弱い？ そのときはそんな印象をもってしまったのでした。(今にして思えば、ほかの選手がより濃かったのかな、とも思いますが)

しかししかし。

今年の東日本インカレで見た福士祐介は、化けてました！

なんとまあ美しく、艶っぽい演技を見せてくれたことか！！



思わず、「これはだれ？」と思ってしまう、大学3年生になった福士選手は、それほどに鮮烈な印象を残してくれました。

調べてみると、福士祐介選手は、2003年、2004年と全日本ジュニアを連覇しているスーパージュニアだったのです。高校生になってからも、高校選抜大会で、2006年は優勝、2007年は4位。インターハイにも、2005年は高校1年生ながら出場しています。

が、高2、高3の夏、福士選手にはインターハイはありませんでした。

福士選手は弘前実業高校の所属でしたが、同じ青森県には、強豪・青森山田高校があり、そこには柴田翔平（現在は青森大学）という、最強のライバルがいたからです。

高2、高3と、青森県代表でインターハイに出場したのは、柴田翔平選手でした。選抜大会に出場すれば、上位に食い込むだけの実力があながら、インターハイには一度しか出場できなかった。それが、高校時代の福士選手だったのです。

東日本インカレでは、後半2種目しか見られなかったのですが、福士選手のクラブは、本当に体の隅々まで美しく動き、見ていてため息の出るような繊細な演技でした。そのあまりの美しさと透明感に、魂が抜かれたようになってしまい、私は泣いてしまいました。

最終種目のロープは、「和」を感じさせる力強い演技で、宙返りしながらの投げなど、はっとさせる手具操作もあり、福士選手らしい「男らしさ」を感じさせる演技でした。

どちらの種目も、福士祐介が、今、本気で高みを目指して登り始めているということを感じさせるものでした。

どこまでいけるのか、どこまで化けるのか。

2年前に「あまり印象に残らない。ちょっと地味？」なんて思ってしまった私を、もっともっと見返してやってほしいです。

選手は常に一生懸命やっています。

だけど、その「本気」さは、常に一定ではないような気がします。

「本気の本気の本気」になったとき、見ている人の心を動かし、驚かせるような演技ができる。そんな気がします。

今年の福士選手は、そんな「本気の本気の本気」を見せてくれそうです。楽しみでなりません。

<撮影:榊原嘉徳>

男子新体操の魅力を伝えます！ ～柴田翔平(青森大学)～

柴田翔平選手には、ずっと前に私がつけたキャッチフレーズがあります。

「手具使いの魔術師」！（あ～、TBS あたりがつけそうな...）

これです。

これにつきます。

柴田選手は、ジュニア時代にも全日本ジュニアチャンピオンになったことがあります。たしか当時から手具操作が抜群にうまかったという印象があります。彼は、ジュニア時代は福島県の福島新体操クラブでやっていたのですが、福島新体操クラブは、女子も手具操作の巧みな選手が多かったのです。おそらくそういう練習傾向のクラブだったのかもしれませんが、また、女子と同じクラブで練習していたためか、柴田選手の手具扱いのうまさ、繊細さには、女子の手具さばきに通じるものもあるように感じます。男子だと、手具操作が粗っぽかったり、やや力任せになる選手もいますが、柴田選手の手具操作は、本当に見ていて気持ちのいい軽やかさとスピードがあります。

だから。

「手具使いの魔術師」...

われながらよいネーミングだと思っています。

ほかの男子新体操サイトでの情報によると、柴田選手はものすごく練習熱心で、だれよりも練習中の運動量が多いそうです。あの巧みな手具操作は、きっとその勤勉さの賜物なのだろうと思います。

ただ、それだけに、手具ミスが出てしまったときの柴田選手の演技は、本人の落胆ぶりがストレートに伝わってきてしまうことが多く(苦笑)、まあ、それだけ本人も手具操作にプライドをもってやっているんだろうなあ、と感じることはできるのですが、残念な結果になってしまったこともままありました。

そして、ジュニア時代からの「巧みさ」に加え、青森山田高校を経て、大学生になり、彼の演技には少しずつ変化が見えてきたように思います。一言で言えば、「派手になってきた」！ 華が出てきた、と思うのです。身体能力も手具操作も申し分ない選手でありながら、ここ数年の男子新体操ではますます重要になってきている「見せ方」(「魅せ方」と言ってもいい)が、今一歩...。柴田選手にはそういう印象がありました。「だれよりも運動量が多い」そんな練習を黙々とこなす、まじめさが演技のうえでは、マイナスに働いていた面があるのかもしれませんが。

しっかりやる。

きっちりやる。



そこが柴田選手の最大の武器であり、ときに欠点だったのかもしれない、と思います。

そんな柴田選手だから、自分で自分のミスを責め、くずれてしまう。そんな演技も何回か見ました。

少々ミスしたって、80%しか力が出せなかったって、120%やれました！ ように見せる。そんな凶々しさが出てくればいいのに・・・。

そんな風に感じていました。

が、柴田選手も、昨年あたりから、徐々にその凶々しさを身につけてきたように思います。なんと言っても、「BLUE TOKYO」にも出てますものね。数年前の柴田選手だったら、ピンクのタキシード姿は想像できませんよ。でも、ちゃんとあれを着て、大観衆の前で笑顔で踊っていましたから。そんな経験が選手を変えないわけではない！

柴田翔平選手は、持ち前の能力を、観客を魅了する力に変換しつつある！ そう思います。

福士選手とは高校時代から同じ青森県で同級生として競ってきた柴田選手。2人ともジュニア時代から力のある選手で、今も拮抗した力を持っています。

しかし、なぜか2人とも「ちょっと地味」・・・きっと本当にまじめな頑張り屋だったんだろうなあ、と思います。2人とも。

そんな2人がそろって大学3年生となり、そろって「なにか」を開花させようとしている、昨年の全日本選手権や今年の東日本インカレを見ていて、そう感じました。大学生まで続ける、長く新体操を続けることで、技術以外のなにかが覚醒することってあるんだな、と。彼らを見てるとそう思います。（女子にもそういう選手はたくさんいます。大貫友梨亜選手や小野田ゆず葉選手など！）

「力のある選手」が、その能力・技術に加えて、「魅力」をあふれさせる瞬間。それが、垣間見えるのが今の柴田翔平選手ではないかと思います。インカレでの彼の演技が、あの見事なロープさばき、クラブさばきが。華やかさの出てきた表現が。

すべて楽しみです。

<撮影：榊原嘉徳>

2010 全日本インカレ直前 ～青森大学① 個人選手編～

インターハイの熱戦は、団体は神埼清明高校（佐賀）、個人は斉藤良輔選手（埼玉栄高校）の優勝で幕を閉じました。団体では、2位の盛岡市立高校、3位の小林秀峰高校も素晴らしい演技だったそうで、数年来ないハイレベルな優勝争いだったようです。

個人も2位の臼井優華選手（岐阜済美高校）に、わずかなミスはあったものの、ほぼ逃げ切れるか、と思われる試合展開だったようですが、最後から2番目の試技順だった斉藤選手が、このうえない完璧な演技で逆転、という手に汗にぎる戦いだったそうです。

さて、そんな興奮も冷めやらぬうちに、もう目の前にインカレが近づいてきています。当分、インカレに向けての事前記事をお届けしましょう。

.....
盛岡市立高校、青森山田高校と続いた東北の旅のしめくくるのは、「青森大学」だ。7月23日の夕方から夜にかけての5時間強、練習を見学させてもらうことができた。

創部から10年たらずで押しも押されぬ「日本の男子新体操の頂点校」となった青森大学の強さの秘密を、垣間見ることのできた貴重な時間だった。

練習レポートは、また追ってお送りするが、まずは、インカレに出場する青森大学の個人選手達を紹介しておこう。

●大舌恭平(4年)

東日本インカレ優勝！まさにスター！である。跳躍力、柔軟性など破格のものがああり、立ち姿だけでも絵になる選手だ。表現力にも秀でており、表情に深みがあるので、どの演技を見ても、色気が感じられる。演技の最後のポーズが決まったときに、「ほうっ」という感嘆のため息がもれるような演技を見せてくれる。時々、大きなミスが出てしまうことがあるが、演技をまとめることができれば、優勝の最有力候補の1人には間違いない。



●増田快雄(3年)

音楽を奏でるようになめらかな動きが秀逸。上体や腕の使い方が柔らかく、叙情的な曲がよく似合う。そった姿勢から伸びるときの独特の間合いなど、音楽によく合った表現力豊かな演技を見せてくれる選手だ。東日本インカレでは8位だが、ミスを最小限に抑えれば、もっと上も狙える可能性を秘めている。

●福士祐介(3年)

今年になってぐっと表現力ができて、「色気」が感じられるようになった。東日本インカレでは大躍進の2位。ずっと伸びた硬質な印象の体の線には独特の清潔感、爽やかさがある。静かな曲調で踊り上げる演技は透明感があって、深い美しさがあり、哀愁も感じられる。演技にも安定感があり、大崩れしないので、インカレではダークホース的存在になるか？





●椎野健人(3年)

きびきびした動きが気持ちいい選手。柔軟性にも秀でており、男子ではきびしい後屈系の姿勢も美しい。動きにメリハリがあり、アクセントのある動きが、音楽と一致していて、とてもダンサブル。きりりと凛々しい表情も魅力的だ。東日本インカレ5位の実力者だ。

●柴田翔平(3年)

言わずと知れた「手具使いの魔術師」！東日本インカレでは、ミスが出て4位にあまんじたが、本来はもっと上を狙える力を持った選手。リングやロープの演技の運動量の多さはおそらく日本一！スピード感あふれる演技で、1分半を走りぬくような演技が決まったときの爽快感は最高だ。近年、開花しつつある表現力にも注目！



●松田陽樹(2年)

非常に個性的な選手で、動きが目を引く。東日本インカレで見たロープの演技は「パイレーツ・オブ・カリビアン」の曲で、疾走感のあるわくわくする演技だった。リングでも、演技序盤、中盤に独特のユニークな動きが入っている。ぐっと射るような視線の強さも魅力。東日本インカレではスティックで6位に入賞している。

●小林 翔(1年)

東日本インカレで3位デビュー！高校時代から柔らかい動き、伸びた姿勢の美しさ、スター性などで目を引いた選手だが、大学生になり手具操作もかなりこなれてきた印象だ。7月に青森大学を訪ねたときには、脚の故障があり、演技を見ることができなかったが、自分のペースで調整していた様子。安定感が増せば、インカレでも台風の目になり得るスーパールキーだ。





●川西雅人(1年)

身長も高く、スタイルのバランスがととてもいい。柔軟性にも恵まれていて甲立ちなどもできる。動きも柔らかく、伸身の形が非常に美しい。1年生だけあって、手具操作には若干の不安が残るが、やさしい顔立ちで爽やかな印象で、これからが楽しみな選手だ。

7月23日の練習では、全員での基礎トレーニングをたっぷり行ったあと、17時半から19時20分までが、個人の通し練習にあてられていた。はじめは軽い流しから、それぞれのペースで通しを行う。

順番に曲がかかるが、通す前に「お願いします！」と告げた選手の通しだけを、中田監督、直美コーチが見て、アドバイスを与えていた。見てもらうところまでまだ仕上がっていない選手は、「お願いします」と言わずに自分での確認をしながら、通す。

肅々とそれぞれの目標に向かって、自分を磨いている、そんな静かな時間がそこには流れていた。

ときに、集中力を欠く通しをしている選手に、厳しい言葉がとぶこともあるが、基本的には中田監督も直美コーチも怒鳴ったりはしない。

「大学生は、自分に厳しい。自分の限界以上にやろうという気持ちはもってやっているから、怒る必要はない。」のだという。そんな自律を重んじる練習が、青森大学の強さを支えているのだ。

2010 全日本インカレ直前 ～青森大学② 団体編～

昨年の全日本選手権では、歴史に残る感動的な演技を見せた青森大学の団体だが、あのときの「どこまでも静」な印象の作品と、今年の作品はかなりテイストが違っている。

東日本インカレで見た今年の作品は、かなり力強い印象の、正統派に「カッコいい」！ そんな作品だった。

7月に青森を訪ねたとき、青森大学では、さらにさらにその作品に磨きをかけている最中だった。いや、単に磨きをかけているという状態ではない。東日本インカレでも十分に感動できる演技だったし、完成度も高かった。しかし、青森大学はそこで満足はしていなかったのだ。私が、練習を見せてもらったのが、7月23日。インカレまではすでに1か月を切っていたが、まだ演技の見直しもしており、「ラストは決まっていない」…そんな状態だった。





今年、「鹿倒立のバリエーション」にさまざまなチームが取り組んでいる。先日のインターハイでも、従来のだれもが知っている入り方ではない鹿倒立がいくつか見られたようだが、そこでも最先端を走っているのが、この青森大学だろう。

東日本インカレで見た青森大学の鹿倒立は、フロア一番奥の選手(外崎成仁)が、はじめから脚がフロア外に出ているのでは？ というくらい端で鹿倒立を行う。万が一、バランスを崩したら間違いなくラインオーバー。そのリスクな位置にまず驚くが、さらに、外崎はその後、鹿倒立から連続してタンブリングに入る

のだ。これには度肝を抜かれた。

昨年の全日本の演技を例に挙げるまでもなく、青森大学の演技の特徴はその「叙情性」だ。私がまだ男子新体操にそれほど関心がなかったころから、「青森大学の団体はせつない。泣ける。ぜひ見てください」とよく新体操ファンから言われていた。「泣ける男子新体操」ってどんなのだろう？ と思っていたが、見ればその意味するところはすぐにわかった。

音楽との一致や、6人の同調性などが素晴らしいことはもちろんだが、6人が織り成すその空気に独特の繊細さがあるのだ。その繊細さゆえに、見ている者の心に染み込んでいく。それが、青森大学の演技の持ち味だ。

その一方で、技術のたしかさ、能力の高さも、揺るぎない。とくに柔軟性を見せる技の美しさはため息が出るほどだ。もちろん、タンブリングも間違いなく強い。まさに「死角なし」の強さなのだ。

しかし。

そのアドバンテージにあまんじないのが、青森大学、なのだと思う。さらに進化した演技を作品を見せたい。その一心で、今まで人がやらなかった技にも挑戦し、インカレ当日まで「もっとよいものにできないか」と見直し続けるのだろう。

7月23日には、まだラストポーズが決まっていなかった。中田吉光監督は、「ラストはインカレまでには決めよう」と選手達に言っていた。そして、「決まるのは直前かもしれないな」と笑った。

もっとよいものがあるのでは？ その可能性を最後の瞬間まで追究する。それが中田監督のやり方なのだ。

では、「よりよい」とは、どういうことなのか？

もちろん、作品がよく見える、高い点数が獲得できるという意味での「よいもの」であることは貪欲に求めている。

しかし、求めているのはそれだけではない。





この日の練習中に中田監督が、何度も口にしていた言葉は「ぐっとこない」「なんも伝わらない」・・・だった。十分に美しい動き、レベルの高い徒手、タンプリング。同調性も悪くない。完成度は高いのだ。

それでも、中田監督が求めているものにはまだ届かない。

「なにかを伝えたい」から、新体操をやっている。

「なにかを伝えたい」から、妥協せず演技を見直す。

「なにかを伝えたい」から、選手達にも厳しく求める。

では、中田監督は「なに」を伝えたいのだろうか。

その答えは、この日の練習風景を見ているうちにわかってきたような気がした。

※榊原 嘉徳(さかきばらよしのり)

⇒1985年よりスポーツ写真を始める。さまざまなジャンルを撮っていたが、体操関係の役員様と出会い新体操、器械体操中心になっていく。現在、スポーツナビ、ジュニア体操連盟での撮影を担当。感動をいかに伝えられるかをモットーに撮影に向き合っている。

第4章 2010全日本インカレ

2010全日本インカレ1日目(個人競技)

●大舌恭平(青森大学)

まず衣装がすごい！サブフロアにいるときからオーラが違う。黒のパンツロンに、袖が肌色ネットに飾りつけのある衣装。足元も黒にしている長い脚がますます長く見える。スティックでは、演技中のジャンプターンがとても美しく、やや芝居がかった表現も似合いすぎる！まさに千両役者！なところを見せた。リングは「ルパン三世」の曲で、本来男子新体操ではないだろう？と思われるダンサブルな動きが随所に入っていたが、それがどれも決まりすぎていて文句のつけようがない。手具の動きは速くないが、それもすべて演出に思わせることのできる演技だった。

●北村将嗣(花園大学)

スティックでは、いつもの北村ワールド全開！曲も動きも独特のテイストで見せる。手具操作も巧みで、動きの中に自然に組み込まれていてバランスのいい演技だ。リングも、気合十分に情熱的な演技を見せてくれたが、最後の脚キャッチでミスが出て、本当に惜しかった。2種目とも「北村将嗣らしい」演技は見せてくれたので、明日に期待！やはり、この人の「踊り心」はすごい！

●柴田翔平(青森大学)

1種目目のスティックでは、宙返り中にも常にスティックが回っているという魔法のような手具使いを存分に見せてくれた。投げを受けて、そのまま投げ返すなど、多彩な投げ受けも見事！爽快な演技だった。リングも、非常にエネルギッシュで、運動量の多い演技をミスなくこなしたが、わずかに滞りが見えた瞬間もあった。しかし、見ごたえ十分な演技で、私は泣きそうだった。こういう演技が成功したときの爽快感はやはりいい！明日も翔平マジックを見せてほしい！

●谷本竜也(花園大学)

相変わらず腕のしなり、指先の流れが美しい～！スティックでは3回前転キャッチもうまく決まって、美しい演技。リングでは落下が1回あったのが残念だったが、2種目ともことん美しい印象の演技だった。上体や腕の動きの美しさに目がいくが、足元にはやや欠点も見えるが、全体的なバランスのよさで相殺されている感じ。

●福士祐介(青森大学)

体を伸ばして、上にホップするときの高さがあり、動から静への切り替えが絶妙！硬質な美しさのある演技で、1種目目のスティックはほぼ完璧に決まったが、リングでは2本投げで1本落下があったのが残念。落下したところ以外の投げは高さもあり、回転も速くよかったし、リングのほうが難しい曲調だったが、うまく表現できていたのだが。残り2種目に期待したい。

●野口勝弘(花園大学)

スティックは非常に大仰な曲を使っていたが、ドラマチックに踊りあげていた。体のラインが美しく、後屈がやわらかい。リングでは力強さとやわらかさが同居する絶妙の演技を見せ、ラストはリングに両足を入れてブリッジの姿勢で終わるという柔軟性を生かした技だった。

●廣庭捷平(福岡大学)

タンブリングや手具操作など能力も高いうえに、スティックでは前衛的な音楽を見事に表現。リングでは一転して正統派の美しい演技をドラマチックに踊りあげるなど、表現の幅の広さを見せてくれた。

●小林 翔(青森大学)

踊り感たっぷりの動きの美しさは格別。上体や腕の動きでの見せ方がうまく、独特の空気をかもし出している。とくにリングでは、ダンス的な動きが多用されながらも、新体操らしいよさが非常に感じられ、ダンスと新体操の巧みな融合を感じさせた。

●椎野健人(青森大学)

柔軟性に秀でていて、他の人にはできないようなポーズができるだけでなく、普通のそりの姿勢なども柔らかさとシャープさがあって、1つ1つのポーズがとても美しい。気持ちよく音楽にのって流れるように展開する演技は見ていてとても爽快だ。

●鈴木駿平(国士舘大学)

リング、スティックともこの選手らしいのびやかさとやさしさのあるいい演技で、ノーマスでまとめた。強い個性や力強さはあと一歩だが、まっすぐな印象の素直な演技は好感度が高く、身体的にも能力的にも穴のない選手。もっと自信がついて、アクが出てくると大化けしそう。

●佐々木智生(国士舘大学)

大きな体がより大きく見える雄大な演技だった。リングでは手具操作の巧みさもを見せてくれて、タンブリングも強く、華もある。とてもバランスのいい選手だ。音楽の世界に入り込む力もあり、叙情的な動き、表情も魅力的だ。

●藤岡顕太(花園大学)

動きがとにかくなめらか。とくにリングの演技では曲に動きがとてもよく合っていて、演じきれていた印象。手具操作、タンブリングなどすべての平均値が高く、見ていて気持ちのいい演技だった。

●植野慎介(中京大学)

リングでは落下が1回あったが、圧巻だったのは2種目目のスティック。宇多田ヒカルの「ファーストラブ」のやさしい曲にのせたどこまでもやさしくやわらかな演技で、「初恋のせつなさ」さえ感じさせる胸にしみる演技で、抜群の表現力を見せた。スティックという手具でこんな表現ができるとは！ という新鮮な驚きがあった。

●菅 正樹(花園大学)

リングで見た巧みな手具操作には脱帽。手具も体もよく動き、スピード感のある演技は爽快。まだ1年生だが、とにかかうまい！ より表現力を増してくると、すごい選手になりそうだ。

●増田快雄(青森大学)

あまりにも音楽に一致した動きはため息もの。リングでのラストの投げうけ(首と足を入れて止める)も見事に決まった。スティックでの落下(場外も?)がとても残念だったが、スティックの演技での独特の動きはすばらしかった。体の隅々までが細かく動くのには感心する。

●磯貝康成(大阪体育大学)

硬軟とりまぜた印象のすばらしい演技を見せてくれた。タンブリングは強く高く、ひねりもすごい。ローリングや甲立ちなど柔軟性も十分にを見せてくれた。フロアを隅々まで使った広がりのある演技はダイナミックで印象に残った。スピード感もあり、やわらかさもあり、緩急のある演技は表現力も感じさせてくれた。

全日本インカレ、青森大学団体、9連覇達成！

「共生」 <前>

青森大学にとって今年のインカレは特別な意味をもっていた。

2002年から始まった団体の連覇。その数字が今年は「9」になる年なのだ。インカレでの団体連覇の記録は、国士舘大学がもっていた8連覇。青森大学は、昨年のインカレでその記録に並び、今年優勝すれば前人未踏の9連覇を成し遂げることになる。

だからというわけではないだろうが、7月に青森大学の見学に行ったときに、そこで目にしたのは、本当に真摯な練習ぶりだった。妥協を許さず、理想を追い求め、高みを目指す。その姿勢が選手はもとより、サポートに回っている部員達にも浸透している。青森大学の練習を見て、そのことに驚き、また感動した。あれから1か月足らず。ついにインカレが開幕した。9連覇が達成できるか否か、8月17日には、結果が出る。

8月16日、大会2日目。長く熱い個人総合競技が終わり、青森大学の犬舌恭平が優勝を飾った。その興奮も冷めやらぬうちに、フロアでは団体の公式練習が始まった。団体は予選と決勝2回の試技の合計得点で優勝が決まる。この日はまず、予選が行われるのだった。

ライバルである花園大学、国士舘大学も公式練習ではきりつとしたよい動きを見せていた、しかし、そのなかでも青森大学は、別格とも言える堂々たる徒手、タンプリングを見せる。そして、なによりも会場を沸かせたのは「タンプリングの神」外崎成仁のダブルスワンだった。高く高く上がった外崎の体は美しい姿勢で2回くるくると回り、すときれいに着地。まさに「ピタリ」とフロアに吸い込まれるように一歩も動かない。公式練習中に、外崎は神がかり的なダブルスワンを決め、地元・青森開催の勢いもあって、絶好調！ そんな印象を見ていた誰もがもったに違いない。

18時15分。団体競技が始まった。青森大学の試技順は5番目。

3番目に登場した花園大学は、例年よりもベーシックでやさしい印象の曲を使用し、いつものアクの強さはやや薄まった印象だったが、動きの美しさはかえって際立つ演技を見せた。ただし、鹿倒立や3バックで小さな乱れがあり、会心の出来！ではなかっただろう。それでも19.025。かなりの高得点が出た。

続いて登場した国士舘大学は、掛け値なしに素晴らしい演技だった。得意の3バック+スワンも一部の乱れもずれもなく、大きさと美しさを存分に見せる演技。山田小太郎の目指す「国士舘らしさ」をまさに体現した演技だったと言えるだろう。この演技にはかなりの高得点が出る。それは誰の目にも明らかだった。

しかし。

青森大学は、おそらくこの国士舘会心の演技をも上回る演技を見せてくれるに違いない。会場に集まっていた応援の人々もそう信じていた。演技が始まる前の会場の空気には「期待」だけが満ち溢れていて、不安の入り込む余地はなかった。

そして、青森大学の演技が始まった。

3人と3人の2つの塊から始まり、いきなり外崎が大きく空中に投げだされるインパクトのある入りも見事に決まり、すぐに第1タンプリングに入る。まず2人が2バックから伸身ひねりをきれいに決め、次の2人のタン

ブリッジも決まる。そして、最後にフロア右奥から斜めに向かってものすごいスピードで外崎が転回してくる。フィニッシュはダブルスワン！ くるくると回り、おりる。

そのとき、外崎の体が前に大きく倒れた。

伏臥、に見えなくもない。前に膝をついたり、尻もちをついたり、場外に飛び出してしまったわけではないので、失敗には見えないこともなかった。現に青森大学の演技を何回も見ているわけではない人達は、「わあっ！」と盛り上がり拍手も起こった。

が、青森大学の応援席だけが、一瞬静まり返った。いつものように「よおし！」とかけようとしていた声をみんなが飲み込んだ、そんな瞬間だった。

大きな滞りはなく、演技は進む。演技序盤での思いがけないミスはあったものの、その後の演技に大きな影響が見られなかったのは、さすが青森大学であり、さすが外崎だ。精神的な動揺がなかったはずはないが、しっかりと立て直し、見せ場の鹿倒立から続けてのタンブリッジも見事にやってのけた。

ただ、鹿倒立のあとのタンブリッジでの交差は、もともと極限まで人と人の間が近く、観客の不安をあおるようにできている。そのスリリングさが見せ場ではあるのだが、この日の交差には演出ではない不安があったように私には見えた。幸い大きなミスにはつながらなかった。しかし、どことなくみんなが少しずつ「あれっ」と感じながらやっているような、そんな不安定さを感じてしまったのだ。

終盤に向けてはどんどん動きもよくなり、青森大学らしい一体感のある演技に戻ってはきたように見えた。いや、もともと傍目からわかるほどの大きなミスがあったわけではないのだ。ただ、序盤のダブルスワンが思いがけない形になってしまったことによる「不安」が常にどこかにつきまとう、そんな演技に見えてしまっただけのことだ。直前の国士館大学の演技が、おそらく本人達にとってもベストに近い出来だったためになおさら「こんなはずでは...」という選手達の気持ちが伝わってきてしまったようにも思う。

演技が終わってフロアから降りた選手たちの中で外崎は見るからに落ち込んでいた。幅広い肩を明らかに落としていたし、周囲も声をかけられない、そんな雰囲気になっていた。そんな外崎に後ろから近づき、ポンと肩をたたいたのは、おそらく鈴木大輔ではなかっただろうか。同じだけの時をこのチームで、青森大学で過ごしてきた4年生だからこそ、なにかせすにはいられなかったのだろう。「大丈夫だ」と言ってるようにも「気にすんな」と言ってるようにもとれる彼の行動だったが、それでも外崎は上を向くことはなく、失意を隠そうともせずにはいた。

演技が終わったときの青森大学応援席もちょっと異様な空気に包まれていた。応援席にいる誰もが、まるで自分が失敗してしまったような、そんな重苦しい空気になっていた。

得点が表示される。19.200。国士館大学と同点だった。

構成点では上回りながら、実施が国士館よりも低い。

この得点で、応援席はいっそう重い空気になった。

団体は2回の試技で決まるとはいえ、予選を終えた時点で、「まず9連覇はかたい」と思えるだけの圧倒的な強さを青森大学が見せるのではないかという予想もあった。それを期待していた人も、こと青森には多かっただろう。

それが、「すべては明日の決勝次第」という結果になってしまった。もちろん、負けているわけではない。同点なのだ。それでも、青森大学応援席は、「まるで負けたような」そんな空気になっていた。

ほどなく応援席に戻ってきた中田監督は、苦笑いしながら「明日までに立て直します」と応援の人達の誰にともなく言った。

団体決勝まであと18時間あまり。

たくさんの時間があるわけではないが、立て直す必要があるのはおそらく気持ちだけ。十分に間に合うはずだ。

中田監督にはその自信もあっただろうし、たとえ自信がなかったとしても「なんとかする」のが、中田吉光だ。

そうして、今までの8年間、インカレを制してきたのだから。

すべては明日。結末は神のみぞ知る。

全日本インカレ、青森大学団体、9連覇達成！

「共生」 <後>

8月17日。

個人種目別決勝では、青森大学の犬舌が4種目中、3種目で優勝。また、福士祐介、柴田翔平らもいくつかの種目でメダルを獲得し、青森大学応援席は沸いていた。もう昨日の重い空気はみじんもない。

なによりも団体の選手たちがすっかり明るさを取り戻していた。

外崎もだ。

内心期するものはあるに違いないが、個人種目別決勝の競技中、彼らは屈託なく仲間の演技に声援を送り、拍手を送っていた。

種目別決勝が終わり、13時50分から団体公式練習が始まった。今日の青森大学の試技順は4番。国士舘大学がトリになる。

公式練習で、外崎はダブルスワンを2回行った。1回目は着地のあとやや大きめにはずみ、一步後ろに動いた。2回目はそれほど大きくははずまなかったが、やはり「ピタリ」とはいかなかった。ただ、そのわずかなはずみでは減点にはならない。採点上はそれで十分成功なのだ。

今までに外崎がこのダブルスワンを着地まで「ピタリ」と決めたのを、私は何回か見ている。現に前日も。公式練習では「ピタリ」と着地していた。この着地が一步も動かず決まれば、どんなにか気持ちがいいだろう。観客もだが、なによりも本人が。本人の達成感、恍惚感は想像に難くない。

だから。

おそらく外崎は、この「ピタリの着地」にこだわって練習してきたのではないか。おそらくそこに懸けてきた。それは痛いほどわかった。

ピタリの着地でなくても減点はない。それならば、「ピタリ」にはこだわらずに確実に着地すべき。昨日のあの失敗を繰り返さないために、外崎は「ピタリではない着地」を公式練習で確認したように見えた。後で聞いた話では、公式練習でダブルスワンを2回やることはめったにないのだそうだ。しかし、このとき外崎は2回確認している。そして、2回とも、着地はピタリではなかったが、失敗しなかった。

決勝では、2番の花園大学、3番の福岡大学とも予選よりもさらに素晴らしいパフォーマンスを見せ、花園大学は19.100、福岡大学18.825。どちらも予選より高い得点をマークした。

そして、青森大学がフロアに現れる。

コールに応じて、外崎が返事をし、手を挙げる。

「青森大学9連覇」を見届けようと前日以上の観客が集まっていた。

男子新体操部員のいつもの野太いかけ声だけでなく、いつになく女性の高い声の応援も多かった。子どものかわいらしい声援も聞こえていた。

青森大学の新体操部が、どれほど愛されているか。

どれほど多くの人に支えられているか。

9連覇のかかった大一番を前にして、この会場の雰囲気の中で、そのことを彼らは痛いほど感じていたのではないだろうか。

「この人達をがっかりさせる演技はできない」…彼らはそんな決意をもってフロアマットにあがった、ように私には見えた。

競技者はもちろん、自分のために研鑽を重ねる。

彼らもおそらくそうだ。

しかし、競技者といえど、ときに「自分のため」よりも「だれかのため」という思いが大きくなる瞬間がある。そして、そんなときには、意外に神様は味方してくれるものだ。

音楽が流れる。東インカレのときとは、使用曲が変わっている。

東インカレの曲は、いわば今ドキのかっこいい、クールな曲だったが、このインカレのために青森大学が用意したのは、重厚でいかにも男子新体操らしい、すこしばかり古臭い感じさえする曲だった。

重厚な音楽にのせて、3人ずつのグループが1つになる。そして、5人が力を合わせて、外崎を高く、高く宙に放つ。外崎は、全身全霊で美しい空中姿勢をつくる。ほんのわずかな時間だが、外崎が跳んでいる間、空間がばあっと広がったように感じた。曲は重いが、この瞬間、光が射しているようにも感じられる、そんな不思議な感覚があった。

そして、問題の第1タンプリング。2人、2人、1人が次々にタンプリングを決め、最後に外崎。ロンダードからバック転、そしてダブルスワン。着地は、はずんですこし後ろに下がった。

しかし、これは失敗ではない。

これが最善の策だった。

外崎は、「着地をピタリと決めたい」という自らのこだわりを、チームのために封印したのだ。団体はチームプレイであり、だれか1人だけのものではない。演技している6人だけのものでさえない。

こと、青森大学の団体演技には、このチームに関わるすべての人達の同じように熱い思いが込められている。

7月に見た練習風景が脳裏に浮かんだ。

演技する6人のまわりを、選手よりも多い人数の部員達が囲んでの練習。ある者は大きな声を出し、ある者はタオルを渡す。飲み物を用意する者もいれば、ワンフレーズの通しが終わると監督よりも先に、「今のとこ、合っていない」「もっとこうだよ」と選手に鋭い指摘をする者が何人もいる。

青森大学の団体演技は、全部員が全身全霊をかけて作り上げている。そして、磨き上げている。断じてフロアで演じている選手だけのものではない。

ましてや、ここまで続けてきた8連覇は、「男子新体操の新興大学」にすぎなかった青森大学で、茨の道を切り開いてきた先輩達が築き上げてきたものだ。それは、みんなで守らなければならない。

今年4年生の外崎は、常に青森大学の団体のキーパーソンだった。「青大、すげえ！」と言われる見せ場には、常に外崎がいた。

だからこそ、外崎は、ここで失敗はできなかった。自分のこだわりよりも、先輩達がつないできた連覇のたすきを後輩につなぐことを優先しなければならないことを、外崎は、きっと誰よりも強く感じていたのではないか。

着地ではずんで一歩後ろに動いた。

最後のインカレでのこのダブルスワンは、外崎にとっては不本意だったかもしれない。しかし、外崎がこの選択をしたことで、青森大学の9連覇は決まった、と私は確信した。

まだ演技序盤だ。

そう決めつけるには早すぎる。

それでも、「間違いない！」と思わせる演技だったのだ。

おそらく、演じている選手たちもそう思っていたのではないか。外崎のダブルスワンが決まった瞬間、外崎が自分のこだわりを曲げてまで勝利を優先した瞬間に、フロアにいる6人はもちろん、応援席の部員達も全員が、「負けられない、いや負けるはずがない！」その思いで1つになった。

第1タンブリングのあと、6人そろっての美しく長いバランスが終わり、上下肢運動に入る前に、「ゆうきー！」という声がかかった。上下肢運動の先頭は、2年生の日高祐樹だ。高3のときには、インターハイ個人・団体の二冠に輝いた選手で、強豪青森大学においても、1年生のときから団体にレギュラーを務めている。

その日高が、先頭を務めるこの部分、7月に見た練習でも、日高は何度も仲間達から注意されていた。もちろん、十二分にできている。それでも、「ゆうき、お前は先頭なんだから」と、フロア外で見ている仲間達からより高い質を求められていた。

日高はその度に、「はいっ」と気持ちのいい返事をして、何回でもやり直しては、見てもらっていた。もっともっと、青森大学の先頭を任せるにふさわしいだけの質の高い上下肢運動を。日高ならきっとその要求に応えることができる、とみんなが信じているのだと感じた。だからこそ、求め続けているのだと。

「ゆうきー！」という声のあとに、「お前ならできる」「まかせたぞ」という声にならない声が聞こえた。そして、日高は深く深く膝を曲げ、両腕をどこまでも高く美しく引き上げる。

「先頭なんだから」・・・そう言って、日高を鍛えあげた仲間達の期待に応える上下肢運動だった。自分のためではなく、いつも自分を見て、引き上げてくれた仲間達のために、「ピタリ」への執着を捨ててチームを優先した外崎のために、日高は120%の力を込めていた。

男子新体操を見慣れていない人には、「ラジオ体操？」にしか見えないこの動きが、こんなにも美しいこと。こんなにも心に響くことを、このとき私は初めて知った。

見せ場の鹿倒立にもまったくぶれがない。続く外崎のタンブリングも自信に満ちていた。そして、予選のときは、ドキドキさせたタンブリングの交差にも、この日はなんの不安もなかった。お互いに信頼し合い、やるべきことを全員がきちんとこなしている。自立し合った6人の見せる交差は、ただ心地よいスリルだけを見ているものに与えてくれた。

音楽がスローパートに入り、きれいにそろった旋回運動で見事な同調性を見せられたとき、「共生」という言葉が、私の中に唐突に流れこんできた。これは今までに感じたことのない感覚だった。「流れこむ」という言葉以外では表現できない勢いで、「共生」というこの作品のテーマが、私の胸に届いたのだ。

フロアに立っている彼らは、この青森大学で共に生きてきた。

そして、それはこの6人だけでなく、中田監督、直美コーチ、それからフロアには立っていない仲間達。

さらには、彼らを支えてきた家族や、応援してくれた友達、恋人もいるかもしれない。

その数え切れないほどの人達と「共に生きてきた証」としてのこの演技であり、作品なのだと、理屈抜きに私の心が感じた。

すこし古臭い印象さえあるこの音楽が、この青森で開催されたインカレにはピッタリとはまっていた。東京や別の土地での開催ではなく、この青森でのインカレだから見に来ていた親御さんや、親戚なども多くいたはずだ。そういう人達の前で、見せる「共生」の演技には、あかぬけすぎていないこの曲が相応しいのだ。

彼らが「共に生きてきた」のは、人だけではなく、この青森という地でもあったから。九州や四国はもちろん、東海、関東からさえも、青森はあまりにも遠い。それでも、「青森で新体操を究める」ことを彼らは選び、そこに集まった人々と、冬には雪かきをしなければ体育館に入れないようなこの青森という土地と、共に生きてきたのだ。

この3分間の演技の中に、そこまでのストーリーを感じとってしまうのは、「妄想」だと笑われてしまうかもしれない。しかし、本当にこのとき、私の目には、目の前で行われている体操ではない、「共生」の物語が映っていたのだ。

6人が3バックの態勢に入る。

青森大学の3バックは、お決まりの「3バック+スワン」ではなく、3バック+スワンのあとに前宙から座で着地をするグループと、2バック+伸身の後方宙返り+バック転+伸身ひねりから伏臥で着地するグループに分かれる。

同調性とダイナミズムの最大の見せ場である3バックの終末が、6人そろってのスワンではないことで、ときにはばらついて見えてしまうことを、私はかねてからすこしばかり残念に思っていた。技術的にはより難しいのだということも、独創性があることも理解はできる。ただ、あの見事にそろった3バック+スワンで感じられる爽快感が、青森大学の演技の中にあることが、じつはフラストレーションになっていたのだ。

しかし、この日の3バックは、2バックのあと、一瞬ばらけたように見えた6人が、着地の瞬間にぴたっと揃ったのがはっきりと感じられた。

着地の姿勢さえも伏臥と座に分かれていて、同調性を感じさせることは針の穴を通すようなものだ。ゆっくりとしたスワンの滞空姿勢が6人ぴったり揃ったときに感じられる「お〜〜〜」というあの時間に比べて、床に着地する瞬間はあまりにも短い。

それでも、この日の演技では、着地した瞬間の「ぴたっ」で、6人そろったスワン以上の同調を伝えることに成功したのだ。

そこからは、もう6人は完全にひとつだった。

吐く息も、吸う息も、まったく同じだった。

そして、会場も。

応援席の部員達のかげ声、観客席の歓声。拍手。

そのすべてが大きな渦となり、青森大学を9連覇へと押し上げていっているような、不思議な力がたしかに感じられた。

重なり合った選手の中から、1年生の菊池正源がわきあがるように姿を現し、演技は終末を迎える。

嵐のような拍手、大歓声。青森大学の優勝を、9連覇を疑うものはいなかった。

私は長い物語を見ていたような感覚から現実に戻った。7月の練習で見たときには、何を表現しているのかわからなかった菊池が現れてくるシーンに、今日は意味が感じられた。最後の動きが表現しているのは、「再生」ではなかったか。

9連覇を成し遂げた青森大学が、10連覇を目指して、また新たな挑戦者として生まれ変わる。9連覇という偉業のあとに、青森大学新体操部は再生する。そんなエピローグが、私には見えた。

得点が表示される。

19.550。9連覇を決定づけるだけの得点だ。

スポーツナビの取材で、はじめて中田監督に電話で話を聞いたときの記憶がよみがえる。

あのとき、中田監督は、「男子新体操の最大の魅力は？」という私の陳腐な質問に、「練習」と即座に答えたのだった。

試合での演技のすばらしさよりもなによりも、演技をみんなで作り上げ、磨き上げていく過程、つまり練習にこそ、魅力があると。

そして、「新体操の団体は究極の自己犠牲」とも彼は言った。

その言葉の意味が、7月の体育館での練習を見て、そして今日のこの演技を見たあとだからこそ、ストンと心におさまった。

このことだったのだ。

そして、7月に練習を見たときに、「この作品で伝えたいことは？」と私が聞いたときに、「作品のテーマというのは決まってない。だけど、何かが伝わるものにしたい」と言っていた、中田監督の伝えなかった何かはこれだったのだ、と思った。

長く新体操を見てきたが、こんな風に、まるで形のあるものが入り込んでくるような実感を伴って、テーマが伝わってきたことはなかった。

中田監督や選手たちが、伝えなかったものとはずれているかもしれないが、ここまでリアルに演技で何かを伝えることは、なかなかできることではない。

目の前で行われている演技と、伝わってくるストーリーがシンクロして、まるで長い夢を見ていたような、そんなこの3分間のことを、私は忘れない。

※青森大学 2010 インカレ団体決勝

<http://www.jpn-gym.or.jp/goods/video/2010/inkare/data/ma.html>



全日本インカレ、青森大学団体、9連覇達成！

中田吉光(青森大学監督)ロングインタビュー

競技が終了しても、中田吉光の体はなかなかあかなかつた。

地元・青森での大会ということもあり、会場のかたづけなど常に気持ちも目も配らなければならない。そのうえ、たくさんの卒業生、現在の部員の保護者なども会場に来ている。

9連覇を決めた心境を聞きたい、と思いながらも、無理かなと思うくらいに、中田は忙しそうだった。

結局、中田に話を聞いたのは、18時近かった。すべてのかたづけを終えた青森大学の部員達とおわりの挨拶をして、やっと解散になったのがその時間だったのだ。

「おめでとうございます」と声をかけると、「いや～」とすこし照れたように、でも、とても嬉しそうな笑顔になった。

まずは、予選の演技なんですが、と切り出すと、中田は、「あれにはビックリした」と率直に言った。「(外崎は)ちょっといいかっこしようとしてたかな」と中田は苦笑いした。「まあ、地元・青森での開催で、親も親戚も見に来てる、いいとこ見せたいという邪念があったんじゃないかと思う」

「邪念が混じると、やっぱりうまくいかないんだよ。何か起きる」と、中田は自分に言い聞かせるように言った。つまり、自分自身も同じ失敗をしたことがある、ということだろう。だから、ある意味、「邪念が混じってしまった」



外崎の気持ちも中田にはよくわかっていたのではないだろうか。

「今回の試合は、直前にインターハイで私が5日間留守にしている、戻ってきてからの調整期間が2日しかなかった。」しかも、その2日間で、中田は、かつての教え子で昨年、急逝した大坪政幸のお参り、さらに、自分の実家の墓参りにも足を運んだという。沖縄でのインターハイから息つく暇もなく、開催地ゆえの負荷も多かったに違いないインカレというハードスケジュールのなかでも、中田にとっては、それは「欠かせないこと」だったのだ。信心深いというよりも、大切な勝負の前だからこそ、自分を支えてきてくれた人たち会っておきたい。「人」を大切に、中田らしいエピソードだ。

「5日もいなくて大丈夫かな、という不安はあった。でも、そこは、選手達が自分達でしっかり試合に向けて気持ちを作ってくれていた、インターハイ前より落ちてなかった。だから、つめきれないまま試合になってしまった感じはあったが、なんとかやれそうだなという感触はあった。」

とは言え、「なんとかやれそう」という手ごたえは、絶対的な自信とまではいかなかった。だから、「これでいける」と安心はしていなかった、と中田は言う。「どこかでミスは起きる、というのは想定内」だったのだそう。

「ミスは想定内。だけど、あそこは予想していなかった。」だから、ビックリしたと中田は正直に言ったのだ。

予選の日の外崎くんの様子は何？ と聞くと、「かなり落ち込んでいた。4年生として今までみんなを引っ張ってきたつもりなのに、自分がミスしてしまい、みんなに顔向けできないみたいなことを言っていた。」という答えが返ってきた。そんな外崎に中田はどう対応したのか。

「夜中に、メールした。「今日のことは忘れろ」と「おれにまかせろ」みたいな内容で。」中田吉光は、現役時代、本番に強い選手だった。それは、監督になってからも変わらない。と、中田は自分の「本番強さ」「運の強さ」を、信じている。いや、信じようとしている。

「おれがいれば大丈夫！」そう言えることで、選手達に力を与えることができることがわかっているからだ。今までに多くの選手から「先生といるとやれそうな気がする」と言われたことがある。そして、その言葉が、中田には最高の喜びなのだと言う。

インカレの前に実家の墓参りは欠かせない。それはある種の願かけのようでもある。中田のなかにも本当は「自分以外のなにか」に頼りたい気持ちはあるに違いない。でも、選手の前ではそんな姿は見せず「おれがいれば大丈夫」と振る舞う。今回もそうだった。



決勝の日の外崎くんのダブルスワンは、着地がすこし動きましたよね、と水を向けると、「あれは私が指示した」と中田は言った。「今までも、あの着地で動くなと言ったことは一度もない。でも、本人が着地ピッタリにこだわっていたのはわかっていた。」それでも、今回は、「着地で動いてもいいじゃないか。そこにこだわりすぎるな」という指示はしたのだそう。

そして、外崎は、公式練習で2回、ダブルス

ワンを決めた。1回目はやや大きく動いたが、2回目の移動はほんのわずかだった。本人も「これなら」と納得したような様子が見えた2回目のダブルスワン。外崎のなかでも、あのときはっきりと「絶対にミスしない。そのためには移動もありだ」と覚悟が決まったように見えた。

「先生がいれば大丈夫」と、選手達から絶大な信頼を寄せられている中田から「着地にこだわるな」と言われたことを、外崎がどう受け止めていたのかはわからない。が、納得するだけの信頼関係がそこにあったのだろうことは、あの公式練習での様子、そして決勝での演技を見ればわかる。

「外崎が公式練習であれを2回やることはめったにないから。」と中田は言った。それだけ、決勝でのダブルスワンが、外崎にとって、またチームにとっての「肝」だったと中田も感じていたに違いない。

本番では、やはり着地は動きましたよね、と私が言うと、中田はうなずいた。さらに、「私はあのとき、優勝できると確信しましたよ」と言葉を続けると、中田はにやりと笑った。もしかしたら、「おれも」と言いたかったのかもしれない。そんな笑顔だった。

「最初に先生にお話をうかがったとき、団体は究極の自己犠牲だと言われましたよね。あの着地を見たときに、このことか！ と思いました。その後の演技からは、伝えたいテーマがぐんぐん伝わってきました。」インタビューしているはずが、自分のほうが熱く語り始めてしまった私の言葉を、中田は嬉しそうに聞いていた。

「はまったね」…中田の言葉に私は、激しくうなずいた。

こんなドラマを見せてくれる男子新体操に、はまらないわけがない。

本番での演技も、すばらしいが、その過程はもっとおもしろい。

しばらくは、男子新体操から目が離せそうもない。



※↑大学の後輩であり、青森大学に中田を呼び寄せた張本人でもある荒川栄(青森山田高校監督)と。

第5章 2010 オールジャパン前

オールジャパン直前企画 青森大学～その強さの秘密

さて。

オールジャパンが迫ってきました。

開幕まであと20日！

その日まで、この『新体操研究所』では、出場する選手、チームをなるべく多く取り上げていきたいと思っています。

そして、その第1回にあたる今回は、ちょっと趣向を変えて、今までなんとなくタイミングを逸して、掲載していなかった秘蔵フォトを公開します。

2006年に開設したものの、開店休業の期間が長かつ

たこのブログを、精力的にやっていたころのきっかけになったのが、「男子新体操」でした。男子新体操の情報発信をしたい！という気持ちから、久々にこのブログを稼働させ、なんだか今年はやけに熱く続けてきてしまいました。



そして、夏には、ついに取材旅行で岩手・青森を「青春18きっぷ」で回るという暴挙にまでおよんだわけですが、その取材旅行のなかでも、かなり印象に残っているのが、今回、写真を公開する「青森大学のバレエレッスン」でした。

女子の新体操ならば、今ではほとんどのクラブがなんらかの形でバレエレッスンを取り入れていたり、週に何回かバレエの先生を招いたり、バレエに通うことを奨励したりしていることと思います。しかし、男子ではおそらく「なかなかそこまでは…」という場合が多いのではないかと思います。

しかし。

青森大学では、バレエをしっかりとやっています。

写真を見ればわかりますが、パーは、体育館の2階の柵です。レッスンしている場所は、ごく普通の体育館の2階です。場所によっては通路程度の広さしかないし、床もとても硬い。もちろん、バレエにはつきものの



鏡だってありません。

それでも、バレエをやっている。

大の男たちが、こんなに大勢で。真剣に。

この光景に、私はただただ圧倒されました。

彼らのなかには、高校まではバレエのバの字もやったことがなかったという子も少なくないはずです。

それが、真剣に大まじめに、バレエに取り組んでいる。

ちゃんと、腕の動きに合わせて視線も動かしている。

この年齢になって、男子がバレエを始めるというのは

かなり抵抗あるのではないかな、と思うのですが、「こんなのやってらんないよ」という空気はまるでありませんでした。

この練習を見てから、私はますます男子新体操が好きになりました。

大学生になってもまだこういうひたむきさをもって、そのスポーツに懸けている人たちがいるということに感動したからです。

彼らは、まだまだ伸びていける自分を信じているのだと感じられました。試合で結果を出している人も、そうでない人も。試合に出ている人も、そうではない人も。

こういう練習の積み重ねが、自分の糧になると、感じることでできる感性を彼らはきつともっているのだろう、と思いました。でなければ、もれなくこんなに真剣にバレーには取り組みません。



男子新体操は、本番フロアでの演技もステキですが、練習もとてもステキです。いや、むしろ「男子新体操のいちばんの魅力は練習だ」と青森大学の中田監督は言われています。



その言葉は、新体操をやっている人達にとってだけでなく、見る側にもあてはまるのかもしれませんが。練習での彼らの美しさといったら...!

この写真ですこしでも伝わればよいのですが。そして。

こんな練習を積み重ねてきた彼らの、素晴らしい演技を見に、11月19日からの代々木第一体育館に足を運んでみようという人がすこしでも増えれば嬉しいです。

オールジャパン直前企画 見逃せない！ 男子大学生選手たち

☆福士祐介(青森大学)

彼はとてもうまい選手だ。ミスも少ない。

そして、とても「いい人」そうだ。これで、「じつはワルなんです」だったらそれはたいした演技力だ、と思うくらい。見るからに、まじめでがまん強く温厚、そして控えめ。そんな風に見える。

人間としては、そのすべては美点だ。しかし、「新体操」という競技においてはすこしばかり損してしまうこともある、ような気がする。

身体能力も高い、手具操作もうまい、身体も手具も高い難度を取り入れた演技をきちんと実施する力がある選手だ。しかも、動きにも粗はない。美しいのだ。音だつてとれている。

あとはただ、「俺ってすごいだろ？」と、見ている者をねじふせるような力さえ備われれば…。

しかし、彼はこの1年で着実にそこを磨いてきている。東インカレのときに見たクラブの演技は、隅々まで美しく澄み切っていた。見ているほうが涙ぐんでしまうくらいに、せつなくて、美しかった。そういう美しさはすでに表現できる選手なのだ。

そして、インカレ前に初めて練習で見たときは、「ちょっとミスマッチ？」にも見えたリングも、インカレのときには、かなりこなせていた。

インカレのリングでは、落下があり点数は下げたが、あの「実直そのもの」の演技をする彼が、女子の新体操でもよく使われる名曲『ハーレム』のもつ妖しさを、ほのかにはあるが醸し出せていたと思う。ほんのすこしの照れもそこにはあったように思うが、でも、彼らしい硬質な美しさが映えるスティックや、男らしさが前面に出たロープとは、まったく違う福士祐介が垣間見える演技にはなっていた。

現在大学3年生。仮に大学までで新体操の現役を終えるとしてもあと1年ある。彼はきっと、変わる。変われると思う。

すでに十分にもっている実力や技術に、見合うだけの自信と凶々しさを身につけて、見ている人を「魅せる演技」をきつと見せてくれるようになる。その変化を見届けられるタイミングで、「福士祐介」という選手の存在に注目することができたことに感謝したい。



☆柴田翔平(青森大学)

インカレ前に青森大学の練習を見学した日、彼は不調だった。リングの演技を通していたが、思うようにいかない。ミスが多い。そして、そんな調子の悪い自分にいらだっているのか、だんだんふてくされたような態度になってきていた。当然、指導者も怒る。ますます、ふてくされる。おそらく彼にとっては「サイアク」な日だったのではないかと。

柴田翔平の演技は、とにかく運動量が多い。身体も手具もこれでもかというくらい動く。それだけに、ミスも出やすいし、ミスしたときが大きい。現にインカレでも、クラブで落下場外(たしか2本とも)を犯した。その結果、総合10位だ。種目別で3位以内に入るものもあるのに、クラブでの大きなミスが響いた。

彼のリスクな演技は、見ているほうはわくわくするが、やっているほうはそりゃ大変だろう、と試合で見ても思っただけだが、練習を見たらますますそう思った。調子悪くてふてくされているような状態でびしりと通せるような演技ではないのだ。

そんなときの彼は、なんだか自分の演技に疲れてしまっているように見えた。「こんな演技じゃ、まとめられるわけない」そう思っているように見えた。演技途中で「やってらんないぜ」という思いが透けて見えてしまうのだ。

それは、私にはとても残念なことだった。わがままかもしれないが、私は彼には、いつも「おれってすごいだろ？」な選手でいてほしいのだ。なにもそんなすごいスピードで手具動かさなくても・・・と見ているほうをハラハラさせながら、でも、自分はだれよりも速く回してやる！という演技をしてほしいのだ。たしかにミスなくやりきることは難しい演技かもしれない。人一倍体力消耗する演技かもしれない。だけど、それをやれる自分のことを好きで、そんな自分の演技を好きで、いてほしいのだ。

だって、本当に彼の演技はスゴイのだから。

たまたま不調な練習を見てしまったせいで、インカレのとき、私の心臓は常に飛び出しそうだった。彼の演技のときの応援が激しすぎて隣にいた A さんからまで「うるさい」と言われてしまった。でも、その応援のおかげではないだろうが、インカレでの彼の演技は、7分の6の確率ですばらしかった。(個人総合の4種目＋種目別で出場した3種目のうち、目に見えるミスがあったのはクラブだけだった)

そして、このときの演技は、ミスが少なかつただけでなく、ちゃんと「自分の演技を楽しんでいる」ように見えた。

そう、私はこんな柴田翔平が見たかったんだ。うれしくなった。

圧巻だったのは、種目別ロープだ。

演技序盤の投げで、落ちてきたロープの片端だけをつかみ、そのままエシヅベでもう片方の端をつかんだ。女子の観客席のほうからも「おお～」という声が上がった。すばらしい技の連続性！ そう見えたのだと思う。しかし、私は違和感を感じていた。たしかそこは・・・両方ともつかむんじゃないかった？ いつも、そこで見事に両端をキャッチすることに感心していただけに、あれっ？ と思ってしまったのだ。

しかし、彼はなにごともしなかったかのように、いや、ますますノッてきたとばかりに、すさまじいスピードで駆け抜けるように演技を終えた。そして、フロアを出たときに、「うへっ」というような照れ笑いをした。

あとで、観客席に戻ってきた彼に聞いてみた。「ロープ、失敗した？」

「しました。つかみそこねました。」と彼は笑って答えた。

やっぱり・・・。

「でも、なんか(ロープが)戻ってきたんで」と、もう一度彼は笑った。

失敗しても、そこでいやにならないで、まるでそれが予定されていた技だったかのようにカバーして演技をやり通すなんて。あのふてくされた練習をしていた彼からは想像できなかった。

でも、彼はそんなこともできるほどの技術をもっているのだ。

だから、ほんとに...

柴田翔平の演技は「スゴイ」なんだって。

オールジャパン。



できれば、願わくば。大きなミスはしないでくれるといいなあ、と願っている。べつに優勝してほしいとかそういうことじゃないのだ。ただ、彼の演技を8回見たいから。彼はそう思わせる選手だ。

☆椎野健人(青森大学)

おなじみのAさんは、この選手が大好きだ。彼女は、椎野選手のことを、「柔軟性があるので、胸後反運動のときの形が最高にきれい。すべての動きにやわらかさとしなやかさがあって、いいと思うわ。味のある雰囲気も好き。」と語る。

たしかに。

椎野選手を語るうえで、その柔軟性ははずせない。男子の選手の間ではかなり柔軟性には恵まれている選手だ。しかも、後屈系の柔軟性があるので、身体を後ろにそらす動きやポーズの美しさは、際立っている。しかし、彼の場合、単に身体が柔らかいのではなく、つなぎの動きに柔らかさがあり、すべての運動がスムーズだ。手具をキャッチするときの動きさえもふんわりと柔らかい。それゆえに、彼の演技は見ていてとても心地よい。変なりきみなどが一切感じられない軽やかな演技なのだ。

ただ、その「軽やかさ」ゆえに、インパクトという点ですこしビハインドがあるようにも思う。いい雰囲気はもっているし、踊り心も十分感じられるのだが、あと一歩、なにか強く印象に残るものがあると、もっと上にいける選手なのではないだろうか。私は、その片鱗を彼の腕と指先に感じている。インカレの取材メモを見直してみたら、「宙に腕をのばすしぐさに雰囲気があってとてもいい」と書いてあった。じつは、フォトクリエイトさんの写真を見たときに、どれも腕と指先が雄弁に語っていることに驚いていたのだが、やはりそれは動いている演技を見ているときも感じていたことだったのだ。表現を追究していくうえで、これは、彼の大きな武器になる違いない。

そして、もう1つ。

いかにも爽やかな雰囲気のある選手だが、意外に根性も負けん気もある、ということ。インカレのとき、最終種目のロープでは投げのコントロールミスがあったが、飛びついて落下を防いだ。点差のつまっている男子の試合では、1つの落下で順位が大きく変わることもある。結果、インカレ総合順位8位。ライバルひしめく青森大学の中でも4番目につけている。最終順位のかかったロープで見せた根性でもぎとった立派な成績だ。

それでも、同じ大学から3人までしか出場できないインカレの種目別決勝には、彼は1種目も出場できなかった。種目別決勝の日、仲間といっしょに大きな声で応援をしていたが、応援しながらもしっかり彼は悔しそうだった。「自分だって」という気持ちを彼はもっている。あきらめてなんかいない。その負けん気が、きっと彼をもっともっと大きくしてくれるに違いない。



☆小林 翔(青森大学)

「青森大学のスーパールーキー」と呼んでいいだろう。1年生ながら、インカレでも見事5位となった小林翔は、昨年のインターハイチャンピオンでもある。さらに言えば、ユースチャンピオンシップ男子の部の初代優勝者(2008年)も彼である。

ユースで優勝したのは、高校2年生のときだが、このときは、本当にまだかわいらしい少年という印象だった。演技も、たしかに当時の高校生たちの中では際立って美しい動きをしていた印象はあるが、それでも、まだこじんまりした演技だったように記憶している。

彼も、男子選手としてはかなり柔軟性に恵まれていて、男子ではなかなかできないような柔軟技も難なくこなしていたが、いわゆる迫力のあるダイナミックなタイプの演技ではなかった。そして、手具もそれほど器用なようには見えなかった。だから、ユースチャンピオンではあるが、「一番うまい選手だった」という印象ではなかったのだ。一番美しい選手ではあったが。

そんな彼は、大学生になって「オトコの魅力」を増してきたな、と感じる。身体もひと回り大きくなり、動きにも迫力が出てきた。そして、手具の動くスピードや操作の多彩さも増してきた。

それでいて、従来からもっていたしなやかさ、柔らかさも健在で、非常にバランスのいい選手になってきた、と思う。かつての小林翔は、「美しいせつない演技」ならすぐにもトップを狙えそうだったが、かっこよくダイナミックな演技となると、ちょっと厳しいかも? という印象だったが、今からの彼はそうではないだろう。美しくせつなくも、かっこよくオトコらしくも演じ分けられるように成長してくれそうだ。

そんな彼の最大の魅力は、演技中での「静から動、動から静」へ動きが変わるときの空気感だ。なんとも抽象的な表現だが、一度、彼の演技を見れば、言っている意味をわかってもらえると思う。

動きをとめてぐうっと身体を引っ張るようにして止まっているときの美しさ、止まっていながらもなぜかその周辺の空気は動いているようなあの感じ。そして、その静止から動き始めるときの一瞬の間。それは音楽ともあいまって、独特の空気を醸し出す。この「魅力」は言葉ではとても表現できない。

男子新体操には楽しみな選手がたくさんいる。しかし、その中でも彼は間違いなく「次世代スター候補」だ。そのスター性に甘えることなく、実力を伴った真のスターへの道を邁進してくれることを期待したい。



☆増田快雄(青森大学)

7月に青森大学の練習を見に行ったときに、観客席から見るのとは違うかなりの至近距離から見た選手たちの演技の中で、私にもっとも強烈な印象を残したのが、この選手の演技だった。



正直、強豪ひしめく青森大学の選手の中では、上のほうにいる選手ではない。しかも、どうも4種目全部をまとめることがまだ苦手なようで、インカレでもスティックで落下を犯し、8点台に沈み総合9位に終わっている。しかし、改めて近くで見た彼の演技には、成績以上のものがあった。もっと上にもおかしくない、もっと点数が出てもおかしくない、と思わせるものがあるのだ。

それはなんだろう？ とよく考えてみた。彼も、男子にしてはかなり柔軟性のある選手だ。そして、彼はその柔軟性を駆使して、ものすごく音に合わせて動くことのできる選手なのだ。彼の演技は、まさに「音楽のきこえてくる演技」だと私は思う。音の1つ1つをとっても大切に、身体を動かしているのがわかるのだ。ちょっとした蛇動や、肩やあごの動きまで使って、音楽を表現しつくしている。私は練習を見ているときも、一度、彼の演技があまり

にも音楽と一致しているので涙が出てしまった。そのくらい音楽と一体になった演技、なのだ。

基本的にはゆっくりとした美しい曲が似合う選手だが、ロープでは彼にしてはスピード感のある曲を使って、これはまたこれでよいのだ。緩急の差が見える演技では、またいちだんと彼の音を表現する力が見える。青森大学は、現在の3年生が豊作で、昨日紹介した福士、柴田両選手のほか、椎野選手、さらにこの増田選手も3年生だ。だれにとってもナンバーワンになることは難しい厳しい環境ではあるが、だからこそ、順位ではなく「自分らしさ」を追究してほしい気もする。とくにこの増田快雄には、彼にはそう思わせる個性がある。もちろん、上を目指すなという意味ではない、「自分らしさ」を追究した先には、きっと結果もついてくる。それだけの實力は十分にある選手だ。

☆川西雅人(青森大学)

7月に青森大学で練習を見たとき、彼はほとんどまともに通せていなかった。ところどころハツとするほどよいのだが、いかんせんミスが多すぎて、どんな選手という印象をもつところまでいかない状態だった。聞けば1年生とのこと。「じゃあ、無理もない」と、そのときの私は思っていた。

ところが。インカレでは、1種目目のリングをミスなく乗り切ると、スティックでも、彼のもつノーブルな美しさを存分に見せるノーミス演技。続く2日目の2種目もノーミス。4種目目にあたったロープは、私が見た練習でまったくまともに通せていなかったのだが、本番では見事にやってのけた。いいものは持っている選手だが、1年生なのでまだ出し切れないか、と思いきや、おとなしそうな顔とは裏腹に、かなり度胸があるのだろうか。それとも「無欲」ゆえにのびのびやれたのだろうか。インカレでの彼の演技は4種目ともすばらしかった。オールジャパンでもぜひ、のびやかに演じてほしい。1年生の彼には、まだ、先は長いからだ。



☆大舌恭平(青森大学)

ここまでたくさんの選手を紹介してきたなかで「ゴールデンエイジ」という言葉を何回か使ってしまっていますが、今年の大学4年生こそは、将来にも語り継がれそうな世代です。「ゴールデン」を超えた「ミラクルエイジ」とも言えばよいでしょうか。

今年度のインカレチャンピオン・大舌恭平(青森大学)、2位の北村将嗣(花園大学)、3位の谷本竜也(花園大学)。この3人は、長い間、常に頂点に近い場所で、競い合ってきました。そして、それぞれに个性的で、おそらく下に続く多くの後輩達に影響を与えてきた選手達だと思います。彼らが大学生としてオールジャパンに出場するのは今年が最後です。現役選手なのも今年が最後、の可能性が高いです。しかし、この先、おそらく男子新体操以外のステージでも活躍が期待されている、そんな3人だけに、今見ておいて絶対に損はありません。いや、見ておかないと後悔しますよ！(笑)オールジャパンのチケットは、かなり売れてきたようですが、まだ空きのある日もあります(19日が狙い目です)。みんな見てほしい選手達ですが、とくに



この3人は！ ぜひぜひ見てもらいたいです。この週末は代々木第一体育館へGO！ です。

では、今年のオールジャパンでも間違いなく中核をなすであろうこの「ミラクルエイジ」を、男子個人選手の締めくりに紹介しましょう。

.....

インカレでの大舌恭平は、まさに「千両役者」の風格と輝きをもっていった。今の彼は、「銀のスプーンをくわえて生まれてきた王子様」のように見える。なんの苦労もなく、持って生まれた才能を生かして、ここまでできたのだろう、というように見えてしまう。彼の演技は、華やかで苦労とか努力とは無縁に見えてしまうのだ。とても自由に、思いのままに踊っているだけなのに、人の心をつかんでしまう、そんな演技に見えるのだ。

しかし、じつは。意外にも大舌は遅咲きな選手だった。

男子新体操の名選手を輩出し続けている岡山県の井原ジュニア。大舌はその創設期からのメンバーだ。

うちにある資料に、彼の名前がいちばん最初に出てくるのは、2002年の全日本ジュニアだ。このとき、井原ジュニアの団体メンバーに名前を連ね、井原ジュニアは4位になっているが、個人では出場していない。同級生の北村はこの年、ジュニアチャンピオンになっており、チームメイトの谷本も個人で9位になっている。この時点で大舌は「出遅れて」いた。翌2003年の全日本ジュニアで、大舌の所属する井原ジュニアは、団体優勝を遂げる。ジュニア最後のこの年、大舌も個人で出場を果たしているのだが、スティック1種目だけに出場し、クラブを棄権。直前の怪我のため、メンバーの替えがきかない団体を優先した苦渋の決断だった。この年、北村は2位、谷本は5位。また少し差が開いてしまった。

2004年には、精研高校に進学。インターハイには、谷本といっしょに団体メンバーとして出場して5位。個人では、当時同じ高校にいた兄・俊平（烏森RGメンバー）がインターハイに出場。北村だけが高1のときから個人でインターハイに出場している。

ところが、2005年3月、高校選抜大会で大舌は、優勝する。個人に関しては全国でなんの実績もなかった高校1年生が、突然の優勝である。しかし、2005年のインターハイでは、精研高校は団体優勝をするが、個人は17位におわる。団体では優勝して、個人が残念な結果におわる、ジュニアのときと同じだった。北村は、この年のインターハイで2位になっている。縮まったと思った差は、また開いたかのように見えた。しかし、2006年、大舌にとって最後のインターハイで、ついに個人優勝を遂げる。この年は、団体でも優勝。大舌は、2つの金メダルを獲得している。個人準優勝は、北村だ。そして、2006年にはオールジャパンにも個人で出場し、なんと5位になる。もちろん、高校生としては最上位だ。

怪我に泣き、ミスに泣いてきた大舌は、高校最後の年になってついに大舞台で結果を出したのだ。

青森大学に進学してからの大舌は、インカレ、オールジャパンにも常に顔を出す選手になった。しかし、優勝にはなかなか手が届かない。おまけに2008年のオールジャパンでは、最終日の演技中に腕を脱臼。見ている人の血の気がひくほどの大きな怪我を負ってしまう。怪我からの復活をかけた2009年インカレは5位、オールジャパンは6位。プランクを考えれば立派な成績だが、優勝にはやはり届かない。大学生活残り1年になった時点で、大舌恭平はまだ無冠だった。

そして迎えた2010年インカレ。大舌の演技には有無を言わせぬ力があった。なにしろ「ミラクルエイジ」だ。同級生であり、ライバルである北村や谷本も見事な演技で応酬した。誰が勝ってもおかしくない、そんな試合だったのだ。しかし、そんな激戦でありながら、なぜか大舌恭平の優勝はまるで必然であるかのような、そんな空気すらあった。それが、2010年のインカレだ。

勝つ試合での大舌は本当に堂々としていて、負ける姿が想像できない。それほどのオーラがある。しかし、それは決して簡単に何回も手に入ったものではないのだ。高校でも大学でも、最後の最後にやっと爆発できた。じつは、大舌恭平はそんな選手だ。

おそらく。

もともとはそれほど「勝ち気」な性格ではないのではないのか。フロアから降りた素の大舌を見ると、そんな気がしてならない。ついに大学チャンピオンに登りつめたというのに、やけに気さくで「近寄りやすい雰囲気」の

かけらもない。人なつこい笑顔の素朴そうな22歳の青年だ。いい意味で、「勝ち続ける選手」というタイプではないのだ。

演技もそうだ。大舌の演技からは、「自分のよさを見せたい」「この動きを見せたい」「こう表現したい」……そんな欲はしっかり見える。ガンガン伝わってくる。

しかし、「負けない！」「俺が一番だ！」という欲は？あまり見えてこない。だからこそ、大舌の演技は、見ている者の心に「うまい、すごい！」だけでない「なにか」を強く残すのではないだろうか。大舌は、実力や素質のわりには「金メダル」には恵まれなかった選手、かもしれない。だけど、それは決して悪いことではないだろう。競技成績は競技成績にすぎない。現役を離れてしまえば、現役時代に思っていたほどの効力などない。

それに対して、演技のもつ魅力、その選手が人としてもつ魅力。それは消えない。あのときのあの選手は何位だったという記憶はすぐに薄れてしまう。しかし、「大舌恭平のルパン(リング)見た？」「大舌恭平の月光(スティック)かっこよかったよね～」という記憶は長く残る。そういうものだから。

オールジャパンで彼は、きっとみんなの記憶に残る演技を見せてくれるに違いない。だって、彼はそのために、ここまで新体操を続けてきたのだから。代々木第一体育館の空気を「恭平オンステージ」に変える、そんな演技を期待したい。

☆青森大学団体

インカレの予選では、すこしばかりひやりとさせた青森大学だったが、決勝では国士館を突き放すような貫禄のノーミス演技を見せ、連覇を「9」に伸ばした。このときの青森大の演技は、強かったうまかったというだけではない感銘を私に与えてくれた。

思えば去年のジャパンで見た青森大の演技も、それは「男子新体操の演技」とは言えないもっと崇高ななにか、のようだった。不思議なものを見た、そんな感じがあり、ともかく感動したことを覚えている。あとでそのジャパンの演技に込められていた思いを知ることができ、納得したが、その思いが、事情を知らなかった私やほかの観客にもずうんと届いたということに驚いたし、感動したものだ。



青森大学は、男子新体操では現在トップを走っている大学だ。そのことに疑う余地はない。有望な選手がたくさん集まってくるし、切磋琢磨できる環境がある。だから、うまくなる。強い。それはある意味、当然のことかもしれない。

しかし、青森大のすごさはその「うまさや強さ」だけではないと思うのだ。表現スポーツとは言いながらも、新体操で何かを表現すること、伝えることは案外難しい。いや一番それが難しいと言ってもいいだろう。「うまかったね」「すごかったね」とは思えても、伝わってくるものはなにもない、そんな演技は巷にあふれている。

新体操はそんなスポーツだ。表現したいという理想はありながら、表現する余地なんてありはしない。(女子はよりそういう傾向にある)

しかし、青森大の演技からは、いつもものすごく「何か」が伝わってくるのだ。ときに、それは偉大な先輩を亡くした哀しみだったりもするのだが。

その「何か」は受け取る人の感じたままでいいと、中田監督は言う。だから、私は今回も、「何を」伝えてくれるのかな、とただ楽しみに見ていたいと思う。もしかしたら、とんでもないものを受け取ってしまうかもしれない



いが、それはそれでお楽しみだ。もちろん、技術的にも最高峰のものが見られることも間違いない。とくに外崎選手のダブルスワンは、新体操というステージで見られるのはこれで最後かもしれない。ぜひ、心して見届けたいと思う。ただ、できることなら青森大の演技は、あれがすごい、これがすごい！ だけでなく、そこで伝えようとしている何かを感じながら見てもらえればと思う。技術もちろん一流だけど、青森大の本当のすごさは、その「伝える力」にあるのだから。

<写真提供:フォトクリエイト>

第6章 2010 オールジャパン

男子個人総合最終結果

- 1位: 北村将嗣(花園大学)【4種目合計=37.925】
- 2位: 大舌恭平(青森大学)【4種目合計=37.750】
- 3位: 谷本竜也(花園大学)【4種目合計=37.575】
- 4位: 野田光太郎(KYOTO 花園R. G. C)【4種目合計=37.250】
- 5位: 福士祐介(青森大学)【4種目合計=37.050】
- 5位: 廣庭捷平(福岡大学)【4種目合計=37.050】
- 7位: 柴田翔平(青森大学)【4種目合計=36.925】
- 8位: 菅 正樹(花園大学)【4種目合計=36.725】

●種目別スティック

- 1位 大舌恭平(青森大学)9.550
- 2位 北村将嗣(花園大学)9.500
- 3位 柴田翔平(青森大学)9.425
- 4位 野田光太郎(KYOTO 花園RGC)9.400
- 5位 増田快雄(青森大学)9.375
- 6位 静 真樹(花園大学)9.300
- 7位 福士祐介(青森大学)8.925
- 8位 植野慎介(中京大学)8.800

●種目別リング

- 1位 北村将嗣(花園大学)9.550
- 2位 大舌恭平(青森大学)9.500
- 3位 谷本竜也(花園大学)9.425
- 4位 柴田翔平(青森大学)9.400
- 4位 野田光太郎(KYOTO 花園RGC)9.400
- 6位 福士祐介(青森大学)9.175
- 6位 有沢一希(アルフレッサ日建産業)9.175
- 8位 篠原良太(国士舘大学)9.000



●種目別ロープ

- 1位 大舌恭平(青森大学)9.550
- 2位 北村将嗣(花園大学)9.500
- 3位 谷本竜也(花園大学)9.400
- 4位 菅 正樹(花園大学)9.350
- 5位 野田光太郎(KYOTO 花園 RGC)9.275
- 5位 佐々木智生(国士舘大学)9.275
- 7位 柴田翔平(青森大学)9.150
- 8位 竹内佑真(花園大学)9.050

●種目別クラブ

- 1位 大舌恭平(青森大学)9.550
- 2位 谷本竜也(花園大学)9.525
- 3位 北村将嗣(花園大学)9.500
- 4位 菅 正樹(花園大学)9.350
- 5位 植野慎介(中京大学)9.325
- 6位 野田光太郎(KYOTO 花園 RGC)9.300
- 6位 臼井優華(岐阜済美高校)9.300
- 8位 鈴木駿平(国士舘大学)9.275



男子団体総合

1位 青森大学

王者らしい貫禄ある演技を見せた青森大学。外崎のダブルスワンは着地でひやりとしたが、もちこたえたのはさすが。小さな揺らぎがあっても、持ちこたえられるのが今の青森大学の強さだ。



2位 花園大学

変幻自在の花園大学は、インカレとはまったく違う曲と構成で、花園大とは思えないスピード感あふれる「ザ・男子新体操」な印象の演技で、文句なしのかっこよさだった。昇り竜のような勢いで初の準優勝！

3位 烏森RG

さすがドリームチーム！ とうならせる迫力の演技だった。動きの美しさも、タンプリングの多彩さも、現役を離れていた人達だとは思えなかった。観客席には「タンプリング」のTシャツを掲げたファンらしき軍団もいたようだ。

団体競技が終わったあとの会場の様子(男子フロア側の観客席)。男子フロア側の観客席は満席！ かくじつに女子フロア側よりも観客が入っていました。しかも、出場者の関係者ではなさそうな一般の観客が多かったことは、画期的だと思います。

本日のエキシビションで、ドラマ「タンプリング」の主題歌を歌ったハニエルが登場して、「まなざし」を歌ったのですが、生「まなざし」をBGMにこの観客席の盛況を見ていたら、感無量になりました。

男子新体操にはたしかに風が吹いていると思います。だけど、これを一過性のものにならないためには、関わるすべての人の力が必要だと思います。私も微力ながら、できることから頑張っていこうと思います。いろんな意味で、記念すべきオールジャパンでした。この場に居合わせられて、本当によかったです。



<撮影:小林隆子>

2010 オールジャパンレポート ～福士祐介(青森大学)

「欲」

オールジャパン1日目、福士祐介は、3位で折り返した。初日のスティックとリングは、見事なノーミス演技で、トップの北村・大舌とはわずか0.05差。印象としては「十分優勝争いに食い込める」...それほどの演技だった。

ミスがなかったことはもちろん、素晴らしいのだが、それ以上に私たち取材チームを感動させたのは、「今回の福士くんはなにかが違う！」ということだった。スティックもリングも、彼の演技内容は濃密だ。手具操作もタンプリングも難しいものがふんだんに入っている。それをミスなく、さらに美しく実施する。それだけでもかなりの力が必要だ。

しかし、1日目の福士祐介は、それをやってのけた。さらに、この日の福士の演技は、今までに見たどの試合での演技よりも「魅せる」演技だったのだ。なにかが大きく変わったわけではないのだと思う。

こういう風に演じるだけの能力や技術はすでに持っていた選手なんだと思う。ただ、今までは希薄だった「欲」が、見えたように思う。

この日の福士祐介の演技は、今までよりも少しずついろいろな部分が粘っていたように感じた。キメのポーズ1つも、今までよりもわずかも美しく、ほんの何ミリの違いにもこだわって、より美しい形を追究し、長く



止まるべきところは0.01秒でも長く止まる。視線を向けるところも、今までよりも少しずつ長かったように感じた。

かつてない吸引力が、この日の彼の演技にはたしかにあったのだ。

1日目にトップに立った北村と大舌は完璧な演技ではなかった。大舌は、リングで落下があり、北村は2種目とも細かいミスがあった。ある意味、初日の2種目をもっとも完璧に、「今まで以上の」演技を見せたのは福士だったのだ。

今まで見てきた試合で、彼はあまり大きなミスをしないう選手だった。この日に見せたほどインパクトのある演技ではなくても、ミスなくまとめ上位にはしっかり入っている、そんな選手だった。その彼が、1日目にこれだけのパフォーマンスを見せたのである。

「もしかして、優勝してしまうんじゃないか」……じつは取材チームの中ではそんな予想(期待と言ってもいい)さえあった。

ただ、おそらく誰よりも福士を応援しているだろうOさんが、「2日目の演

技時間が早いのが不安要素」と言っていた。朝も早いので、体が暖まらないのではないかと、緊張もしやすいのではないかと、そう案じていた。そのとき、私は「心配しすぎじゃない～」くらいに思っていた。

優勝できるか、はわからないけれど、大きく崩れることはないだろう。そう思わせるものが、1日目の福士祐介にはたしかにあったのだ。

迎えた2日目、福士は試技順2番でロープに登場した。福士の前に演技をしたのが、種目こそ違おうが大舌で、「優勝を決めたか？」と思うほどの気迫満点のクラブの演技だった。そんな興奮の余韻の残るなか、福士はフロアに出てきた。

途中でロープを足にひっかける小さなミスはあったが、今日も悪くない。見せるべきところは、視線をしっかりと引っ張れる演技をしている。見せ場の宙返りしながらの投げも、今まで以上に軽やかに高く投げ上げていて魔法のようだ。いいぞ！ と思ったのだが、ラスト直前で必要以上にロープが体にまきついてしまい、演

技がもたつた。落下ほど大きなミスではないが、そこまでの演技が良かったわりに印象の悪いおわりになってしまった。

9.125 は、種目別決勝に残れるかどうかという得点だ。前日3位の福士にとっては痛い。早い試技順で朝が早かった。それはたしかに不利だったかもしれない。しかし、そんなことはすでに何度も経験しているだろう選手である。「すばらしすぎた1日目」のあと、何かが彼の中で変わったのかもしれない。それは、無理もないことなのだが。

最終種目となったクラブ。フロアに立ってポーズをとり、音楽を待つその姿だけでも美しい。さざ波ひとつ立っていない静かな湖面のような、神秘的な美しさがある。せつない、美しい曲で、よどみなく動く。静かな静かな演技なのに、ハッとさせる手具操作は存分に組みこまれている。リスクなクラブの背面キャッチも決まり、どこまでも美しい空気が彼の回りに流れていた。

ああ、本当に。福士祐介は、一段階段を上ったんだな、そう思わせるに十分な演技だった。が、なんと落下場外！ 素早く反応して演技の中断は最小限におさえたが、大きな減点は免れない。そこまでの演技がよかっただけに、また、そのあともしっかり持ち直しただけに、悔やまれる落下場外だった。

クラブの得点は、9.075。結果だけを取り上げれば、1日目がよすぎて2日目はミスして自滅・・・2010年のジャパンは福士にとって悔いの残るものになってしまったかもしれない。

しかし、今その場で出た結果だけでは判断できないもの、というのが必ずある、と思うのだ。

今までミスで崩れることの少なかった福士が、より経験値も上がっているはずの大学3年生の試合で、なぜ2日目に自滅してしまったのか。それは彼が、今までにはなかった(いや、なくはなかったのだろうが希薄だった)欲をもってこの試合に挑んだためではなかったか。

その「欲」が、優勝したいという欲だったのかどうかはわからない。私にはむしろそういうことよりも、「今までにない自分」を見せたいという欲だったように思えた。

だからこそ、たしかに「今までにない演技」を私は見せてもらったのだ。4種目で合計6分のうちの5分50秒くらいはどこもかしこも、今まで以上にすばらしい魅せる演技だったじゃないか。ただ、そういう今までにない欲をもってしまったからこそ、ミスが出る。そんなこともあるんだと思う。

思ったのは、これが大学3年のときでよかった、ということだ。

自分が欲をもったときに、どこまでできるか、その限界は自分が思っているよりももっと高いところにあると、今回、福士は知ったはずだ。だったら



そこを目指すしかないだろう。そこを目指すためには、何をすべきか。そんなことは誰が言わなくても彼はわかっているはずだ。

青森大学の先輩であり、2008、2009年のオールジャパンを連覇した春日克之は、2009年のジャパンで極限とも思える演技を4種目ノーマスで演じた。最後の年、連覇のかかった年、欲が出ないわけではない。それなのに、なぜそんな磐石の演技ができたのか？ 春日に聞いたときに彼は言った。

「練習しかないです。」

福士祐介は、その春日の背中を見て育っている。

大丈夫、きっとやれる！

<撮影:小林隆子>

2010 オールジャパンレポート ～柴田翔平(青森大学)

「壁」

正直に言おう。

男子新体操を取材で熱心に見始めた2008年のオールジャパン、柴田翔平は出場していたが、それほど印象には残っていない。

あのときの私は、「男子新体操界のハニカミ王子(なつかしい!)」を探すという使命を担っていたので、柴田のような職人肌の選手はスルーしてしまっていたようだ。

しかし、2009年の東日本インカレから、女子とまったく同じウエイトで男子新体操を見るようになり、取材メモの量も互角になった。そして、このときから、私の取材メモには柴田に感ずる記述が一気に増えている。手具さばきのうまさに関してが多いのだが、「動きが洗練されてきた」「曲を表現できている」など、アスリートとして以外の面での評価もぐっとあがってきているのだ。

自分でも、よく覚えている。はじめのころ、私は、柴田の演技を「うまいけど、そんなに好きではない」と思っていたのだ。ただ、あまりにも手具がうまいから、そこは見ずにはいられなかった。いつも感心していた。「好き」ではないけど、「うまい」選手、それが私にとっての柴田翔平だった。

それがいったい。

いつから変わったのかな、と自分のメモを見直してみた。

それは、おそらく2009年の東日本インカレ。

このときのロープの演技についてこう書いてある。

「ただのなわとびも見せ場にするロープの張りがすごい！」

このときに、私は、「こういう選手もいるんだ」「こういう魅力もあるんだ」と気づいたのだ。

女子でいえば、日高舞選手を好きになったときと、気持ちの動きが似ている。はじめは「うまい選手」としか思っていなかったのが、その「うまさ」を追究する姿に感動して、「好きな選手」になる。そういう感じだ。

2009年から、私は柴田のことをかなり応援モードで見えるようになっていた。そして、インカレでは8位、オールジャパンでは3位。ジャパンでは種目別ロープで優勝もしている。

たしかに、この年、柴田の演技はいつも大きくは崩れなかったように思う。見るたびに、「いやあ、うまい」と思わせてもらったし、ワクワクした。ただ、なぜか私の中には、「あ～あ」という彼自身のため息が聞こえてきそうな演技が何回か印象に残ってしまっている。得点でいえば、9.300以下くらいのときは、どこかでミスをしていたのだと思う。なにしろ、いいときは9.400も超えてくる選手なのだから。

そして、このわずかなミスを、とても引きずった印象の演技をしてしまう「弱さ」を、私は、彼に感じてしまっていた。

その「弱さ」を、克服してくれる年になればいいな、と願いながら、2010年は、柴田を見続けてきた。

インカレでは、高い確率で、いい演技を見せてくれた。そして、オールジャパン！ 昨年は、総合3位、ロープでは優勝しているゲンのいい大会、会場だ。正直、かなり期待していた。

結果、個人総合はクラブでの落下・場外が響いて7位。種目別はスティックで3位、リングが4位、ロープはミスがあり7位。

1年前の自分を超えることはできなかった・・・そんな結果に終わった。

初日の2種目は悪くなかったのだ。いや、かなりよかった、と思う。

しかし、2日目に「なにか」が変わってしまった。そんなジャパンでの演技だった。おそらく悔いは残っているに違いない。

もう大学3年生なのだ。学生時代はあと1年しか残っていない。

先日の井原フェスティバルで、「BLUE TOKYO」のメンバーとして踊る柴田を見た。オールジャパン以来だ。やはりいい！ 2年前には、手具のうまさ以外は、それほど印象に残らなかった選手だとは思えない（自分の見る目が未熟だったとも言えるが）。彼は確実に魅力的な選手になっている。動きも見せ方も変わってきている。それは間違いない。

もしかしたら。

今年は、彼にとって「変化の年」だったのかもしれない、と思った。

「難度はすごいけど、手具操作はうまいけど」と言われる選手からの脱皮を、彼は彼なりに模索しているのかもしれない、と。その模索の中で、万全だったはずの手具操作でミスが出てしまう。そんな年だったのではないかと。そんな風に思った。

迷ったり、悩んだり、落ち込んだり・・・そんな時期もあったほうがいい。そんな壁にはたくさん当たったほうが、最後には魅力的な選手になる。



「弱さ」だってあっていい。「弱さ」や「危うさ」を抱えながら、それでも踏ん張ろうとする姿に人は心が動くのだから。

そう、だから。

そんな選手ほど、私は応援したくなるのだ。

今年、柴田にはクラブが鬼門だった。ジャパンではインカレと曲も変えて心機一転をはかっている、ほかの種目に比べて「美しさ」も見える華麗ですてきな演技だった。しかし、落下2回で、8.950。柴田にはめった



にない9点割れ。それでも・・・私は、柴田のクラブが好きだ。

手具操作ももちろんすごい。常にクラブが動いている。しかし、それだけではない、今回のジャパンでの演技も、その前の演技も、クラブだけは柴田にしては「きれいな曲」を使っていて、華麗に見えるのだ。スピード感が持ち味の柴田だが、4種目のなかで1つくらいは、こういう違う一面を見せてくれるのはとてもいいと思う。

来シーズン、どの種目をどんな演技、曲でくるのかわからないが、ぜひ1種目は、やさしい曲や華麗な曲で、ときめかせてほしいな、と思う。そして、意外とそこに突破口があるかもしれない、と思う。

いずれにしても。

来年が、柴田翔平にとってどんな年になるのか。

それはまったくわからない。

だけど、たとえミスしても、勝てなかったとしても、必死に壁に立ち向かう姿が見られれば、それでいい。自分の演技を楽しんでくれれば、さらにいい。変わろうとする自分も楽しんでくれれば最高だ！

あと1年。ちょっと暑苦しいかもしれないが、見守らせてもらうから！

<撮影:小林隆子>

男子新体操、2010年を締めくくる至高の対決 北村将嗣 vs. 大舌恭平

■きん差の接戦 ぶつかりあった、二つの魂

2010年11月20日、第63回全日本新体操選手権の2日目。男子個人総合では、前半2種目を終えて、今年度学生チャンピオンの大舌恭平（青森大）と、2007年にすでに一度全日本チャンピオンになっている北村将嗣（花園大）の2人が、18,900の同点で首位に並んでいた。

迎えた2日目、大舌はクラブの試技順1番でフロアに登場した。クラブは大舌の良さが最もよく見える作品。一つ一つの動きに「自分の良さを見せつける」という意思が感じられる強い演技を完ぺきにこなし、その時点での最高得点となる9,525をマーク。まるで、「勝つのは俺だ!」と宣言するかのような演技だった。

対する北村のクラブの演技は、フラメンコギターの調べにのった芸術性あふれる演技で、手具のキャッチひとつにまで曲に合わせた表情が感じられる。大舌が見せた「勝利への執念」とは、対極にある「自分の表現の世界に入り込む」演技で、得点は9,500。大舌が一步、リードした。

最終種目のロープは、大舌が先に演技を行った。大舌がこだわり続けてきた体の線、とくに脚の美しさを存分に見せる演技だったが、痛恨の落下が1回あり、9,325に終わる。この時点で、北村は最終種目で9,350以上を出せば優勝という優位に立った。9,350は北村には十分可能な点数である。が、それだけにこの局面で、平常心で演技することは難しいのではないか、そんな展開になった。

北村のロープは、少しゆっくりしたピアノの旋律で始まる。しかし、どんどんスピードが上がっていき、彼独特の息もつかせぬような手具操作が次々と繰り出される。一瞬でもたつくところがあれば、演技全体の印象はぐんと落ちてしまう、そんな作品だが、この一世代の勝負が懸かった場面で、北村のロープには寸分の狂いもなかった。どこまでも音楽と手具とが一体となった軽やかな演技は、9,525という高い評価で、北村将嗣は2007年に続いて2度目の全日本チャンピオンになった。

ロープの演技を終えてフロアマットから降りるとき、北村はマットに手をつけて何かをつぶやいていた。それから今度は、審判に対して、観客に対して誰よりも深く頭を下げ、「あ

りがとうございました」と大きな声で言った。このとき、大学生活最後の一番大事な試合で、最高の演技をさせてくれたすべてのものに彼は感謝しているようだった。

■北村が戦った“欲”

表彰式後のインタビューで北村は、「個人的には新体操に点数って必要なのかな？ と思います。一人ひとり違うことをやっているのだから、順位なんてつけられないんじゃないかと」と言った。もちろん、勝てばうれしい、負ければ悔しい、でもそれだけが価値ではない。「曲はBGMではないので、ちゃんと動きや操作が曲に合った演技がしたい。それも、人とは違うことをやりたい」と言う北村。

演技構成を考えるのが得意で、「手具で遊んでいれば演技はできます」とも言う。本当に新体操が好きで、好きでここまで来たのだろうということがよく分かる。

それでも、ときに“勝ちたい気持ち”にのまれそうになる、だから、今大会では意識的に途中経過をまったく耳に入れないようにしてきたのだそう。

「無欲」な状態をつくるように努め、「勝つことよりも、応援してくれた人たちに自分の成長を見せられたらいい」という気持ちを大切にしたい。その結果、今大会での彼の演技はどこまでも自由に躍動し、そこに「勝利」は舞い降りた。

■大舌にみなぎっていた

エネルギー

一方、きん差で準優勝となった大舌は、この結果を「正直悔しい」と言った。インカレでは北村を抑えて優勝しているだけに、彼はこの大会での優勝を狙っていた。本来は大舌も「一番重要視しているのは表現。曲のイメージに合った動きを考え、曲とマッチする演技をつくるのが一番難しく、楽し



い」と言うような選手だ。また、自分の個性へのこだわりが強く、「自分だから見せられる人とは違う良さをアピールして、会場を沸かせたい」と語るように、大舌のモチベーションは常にそこにある。

しかし、その大舌が今回の全日本では「勝ち」にこだわった。北村とは対照的に、大舌は“勝ちたい気持ち”を正直に出した演技を見せた。だから、この大会での大舌の演技にはすさまじいほどのエネルギーがあった。大きな身体、広い可動域を生かしたダイナミックな演技が持ち味の選手ではあるが、この大会での演技は、周りの空気を熱風に変えるほどのパッションにあふれていた。「チャンピオンにふさわしい」という説得力は大舌の演技にも十分あった。勝負のあや、時の運。個人総合での北村との差はそれだけだったように思う。

現に3日目の種目別決勝では、3種目を大舌が制した。唯一優勝を逃したリングでも1位の北村とはわずか0.05差。もう少しで4種目を制覇する勢いだった。

2010年は、男子新体操にとっていい年だった。テレビドラマ化、舞台化で認知度もあがり、全日本選手権でもかつてない観客数を集めた。そして、北村将嗣、大舌恭平という2人のチャンピオンの至高の戦いを、今シーズン最後の大会で見ることができた。

「男子新体操の魅力、可能性」を多くの人に知ってもらうことができた2010年、男子新体操の本当の勝負はこれからだ。

※小林隆子(こばやしただかこ)

⇒AJPS(日本スポーツプレス協会)会員のカメラマン。『DDD』『クララ』『スポーツナビ』などで活動するとともに、自ら運営するWebサイト『Figgy』では、感性豊かな新体操の写真を公開している。

第7章 夢への一步

TBSドラマ「タンブリング」勝手にタイアップ企画～ 男子新体操の魅力を伝えます！ ～BLUE TOKYO on STAGE～

6月5日、Zepp Tokyoで行われたダンスイベント「UNITED」に、青森大学新体操部のメンバーで構成されたユニット「BLUE TOKYO」が出演しました。以下はそのときの写真です。

いや～～～～、もうかっこよかったですよ～！ 共演者は、DA PUMP だの LEAD（「タンブリング」の鷺津学院キャプテン・中土居くんがいます！）だのといったダンス巧者たちですから。おまけに、会場は、息もきれそうなくらいの満員御礼。ほとんどが若い女の子！

そんな中に、青森で新体操一筋？ の生活を送っているだろう青年たちが登場するっていうんだから、見ているほうがドキドキしちゃいます。なまならないか？（いや、しゃべりませんから）とかね。

まじめな話、普通の体育館、フロアマットとは違う、狭いステージ、多分つるつるの床で、怪我しないだろうか、という心配もあり。なんとと言っても、大半の観客にとっては「この人たち、だれ？」なわけですから、盛り上がりず、「シーン」となったらどうしよう？ などなど。

「あんたは親か？」くらいにあれこれ気をもみながら見ていたわけですが、その心配は、すべて杞憂に終わりました。そりゃもう素晴らしい演技で！ おまけに会場も大盛り上がりで！ なまることもなく！

ステージ上で大暴れ！ ええ、衣装派手です。それがまた似合っていました。

じつは、私、4月に渋谷でやった第1回の「UNITED」にも行ってんです。そのときは、彼らは本当に無



名でした。このイベント前半は、各ユニットのダンスタイムなんですが、登場前に、スクリーンに次に登場するユニットのメンバー名と写真が次々に映し出され、最後にユニット名がばあんと出ると、会場「ぎゃ—————！」そして、登場という演出になっているのです。

「BLUE TOKYO」の出番は、すべてのユニットが出終わったあと、後半のコラボタイムとのちょうど間でした。ダンスタイムのトリは、DA PUMP で、会場は盛り上がりきったところで、スクリーンには、さらっと「BLUE

TOKYO」という文字だけが流れ、「ん？なに？」…4月の渋谷ではそんな反応でした。

いざ踊り始めると、あまりの迫力に会場は大騒ぎ、ではありましたが、名前が出ただけで「ぎゃー！」というわけにはいきませんでした。

そして、今回。イベントの流れは4月とまったく同じ(しかし、各ユニットのダンスはよりパワーアップしていた印象でした。中土居くんも、新体操の特訓効果か、ひときわ可動域の広い踊りを見せてましたよ～)ダンスタイムの最後に、DA PUMP が登場。会場がすさまじい興奮に包まれたあと、いよいよ、BLUE TOKYO が登場します。まず、スクリーンにユニット名が…おっ！ 今回は、メンバーの名前が1人ずつ出ました。写真も。でも、さすがにここで「ぎゃー！」はほとんどありません。そりゃそうですよね。「小林翔」とか「大舌恭平」とか言われても、普通は知りませんから。(ちなみに、私の隣にはいつもの特派員・Aさんがいて、「ぎゃー！」と叫びそうな勢いでしたが、もちろん私も。)

しかししかし。最後に「BLUE TOKYO」と、ユニット名がぼーんと出ると、「ぎゃー！」まではいきませんが、はっきりと聞こえました。「きゃー！」という黄色い歓声が。うわ～～～～～、知ってる人がいるんだ。「待ってました！」って迎えてくれるお客さんがいるんだ！

もう、この時点で私とAさんは泣きそうでしたね…。男子新体操がですよ。山本裕典くんや三浦翔平くんじゃなくても、「きゃー！」とか言われているなんて…。なんだか夢のようでした。

今回は、4月よりも長いバージョンになっており、写真に写っている衣装になる前に、トップは白、ボトムは紫(黒かな?)のようなパンツで、とつてもしなやかな徒手でのダンスが加わっていました。このイベントに出演しているユニットは、みな素晴らしいダンスのプロフェッショナルですが、ほとんどがヒップホップなど、速い動きのダンスなので、この序盤で「BLUE TOKYO」が見せたような、ゆっくりとした美しい動きは、新鮮でした。会場、しーんとなって見入っていましたから！



そして、いったん舞台からはけて、戻ってきたらこの衣装、そして、音楽も軽快に変わり、そこからは、タンプリングで乱れ跳び～、スティックやロープも魔術師のように駆使～、しっかりバランスや鹿倒立も披露！(「タンプリング」効果でしょうか、鹿倒立のときの盛り上がり、4月よりもすごかった。「あれだ～」と思って見ている人が増えていたんでしょうね)

Aさんや私の周りには、タレントさんやダンサー？みたいな人も多かったのですが、みんな大喝采でした。とくにダンサーなのか？ な

若い男の子達は「すげー、すげー！」「うおおおおおお！」と足を踏み鳴らしておりました。ええ、すごいんですよ、この人たち！ どんなもんだい！ となぜか得意になる私たち。いや、べつにうちの息子じゃないんですけどね。

この「UNITED」というイベントそのものが、ダンス好きな人にとってはかなりエキサイトできるものです。おまけに「BLUE TOKYO」のステージも見られるとあっては…。次の機会にはまた行くっきゃない！ です。ただ、チケット争奪戦はかなり熾烈らしく。発売即日完売らしいです。次回の情報が入次第、このブログでもご案内しますので、みなさん、ぜひ足を運んでみてください。大満足間違いなし！ ですよ。

LEADの中土居くんも、ドラマの役柄とは違って、ほんとにさわやかでかっこいいんですよ～！ ぜひぜひ多くの方に見てほしいイベントです。次回は、「BLUE TOKYO」と名前が流れたときの、「きゃー！」が「ぎゃあああああっ！」となるといいなあ～、いや、きつとなるし！

<写真提供:VISION FACTORY>

～BLUE TOKYO in 国際フォーラム～

9月23日、行ってまいりましたよ～！

東京・有楽町の国際フォーラム！

ダンスイベント「United vol.3」、回を重ねるごとに会場が大きくなってきているこのイベント。ついに、国際フォーラムって……。いきなりとてつもなく大きくなってないかい？ といささか心配になりつつ。



だって、「BLUE TOKYO」の「BLUE」は「青森」の「青」なんですから。いくらもうすぐ新幹線が通ると言っても青森は遠いんですから。もとはと言えば、決して観客動員だっていいとは言えない男子新体操の世界の人たちなんですよ。こんな華やかな舞台、こんな大きな舞台でほんとにやれるのか～？ と、初回から United を見てきた私は、なんだか会場につくやいなや、とてもドキドキしてしまったのでした。

が、しかし。

そんな心配を吹き飛ばしてくれるようなパフォーマンスを彼らは見せてくれたのでした。

まず、この「United」というイベントそのものが、今回一気にグレードアップしていたと私は感じました。一緒に行った A さんも2回目から見ているので「前のとはまったく違う」と驚嘆を隠しきれず。

もちろん、前の2回もよかったんですよ。それでも、今回のステージを見たら、今まで手探りでやってきた

のが、ここで確信に変わった！ そんな変化が見えるステージでした。

今まではそれぞれの出演者の集合体的なイベント(ショーケース的な、というのでしょうか)だったと思うのですが、今回は、みんなで作り上げたという感じがぐんと強くなっていました。イベント自体がひとつの作品という感じになっていたし。

それにとまってわれらが BLUE TOKYO も今までの「新体操で鍛えてきた技をダンスのステージで見せちゃうよ！」的な演目から、かなり違ったものにチャレンジしていました。

そして、そこには、やはり彼らでなければできない表現があり、とても可能性を感じさせるものでした。

今回のイベントでの、BLUE TOKYO の出番は、今までとは違って、すこしミュージカル的なつくりになっていた2部の中にありました。1人の女の子が風船を追いかけて入ってしまった不思議な世界の中で登場するのですが、まず天井から長い布が下りてきて、そこに1人のダンサーが上っていきます。(これは BLUE TOKYO のメンバーではありません)最近はさまざまなショーなどで見る機会も増えてきた「エアリアル」というやつですが、この幻想的な演出の中で、登場した BLUE TOKYO の面々は、黒ずくめの衣装に、仮面をつけているのか？ というような妖しいメイク。照明も暗めで、誰が誰だかよくわからなかったのが残念なんですけど、今回の手具はリング。全員がリング2つをぶんぶん回すような手具の見せ場もありましたが、なんと言っても、今回の見どころはその「ダンス要素」だったのでは。手具をやらせればもちろん、すごい。タンブリングでも、見ている人をうわあっ！ と言わせられる。そんな彼らが、今回はおそらくとても苦労して、とても練習したんじゃないかな、と思われる幻想的なダンスを踊っていました。このイベントのほかのダンサーさん達だと、ヒップホップ系の今ドキのダンスが多いのですが、彼らのはそれとは違う、どっちかという「舞踏」のほうに近い印象でした。

それでも、基礎をしっかりとやっていることでは定評のある青森大学の選手たちですから、かなりきれいに動いていたと思います。ダンスではまだプロとは言えないのかもしれませんが、それでも、かなり「魅せる」ことはできていたと思います。

男子新体操の選手たちだからできる、普通の人から見ればマジックのような手具扱いやタンブリングは、こ



ういった幻想的な演目では映えるなあ、とも思いました。

最近、あのシルク・ドゥ・ソレイユが男子新体操に関心を寄せているという記事を見たりしますが(インカレの会場にブースもあり、オーディションの勧誘?もしていました)、今回の BLUE TOKYO のパフォーマンスを見て、これはやれるんじゃないか！ という思いを強くしました。

明るく楽しくかっこよく、男子新体操を



見せるのもよいけれど、せっかく培った技術と身体能力で、普通の人たちではなかなかできない表現をしていく、ということに男子新体操は大きな可能性をもっているように思ったのです。

男子新体操を生かせる、表現の場、ステージの新たな方向性を感じさせてくれた今回のパフォーマンスは、かなりよかったと思います。

今までの2回とはまったく違う面を見せてくれた BLUE TOKYO、次はどんな可能性を切り開いてくれるのか？ ますます楽しみになってきました。

●BLUE TOKYO in United vol.3

<http://www.youtube.com/watch?v=JDiiUzgrErA&sns=fb>

<写真提供:VISION FACTORY>

男子新体操に恋してる！（青森大学2010）

<http://p.booklog.jp/book/50651>

著者：rgkeikos

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rgkeikos/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50651>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50651>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.